863
231

野辺夕露

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用

863/231

例言

一今此の如く記すと雖明治維新の頃墓地法改正ありしより古墳の保存となり施行二年号寄信を寄る者は毀ち撤去すと傳徒不如法の國規を立てしより各ち此卵塔場に至り見るに古墳の存在せしを希ふ者あるに于此記す者十の七は毀ち除かれんと案ずるに此記を知らず限界の出ずるを見るに是を知らずしてあるべし

一此書に載せし中にも洪傳の墓如きは同異の淺間の墓赤坂の屋上牛込の旅初の墓の如きは妄の甚しきものあり

一同異比翼塚の如き一は同異善伊家東昌寺跡一は永峯平氏中根某の根地連理塚の如き實若何

一ものを知らず

一博士寺塔所は多く俗家と寄し古墳の存するは稀しあり

國立圖書館
昭 24. 3. 29 和
寄贈

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』 請求記号 863-231
ガラス使用

一東叡山下寺に如き右なり

一此出中人に小傳も多くは傍記にまことを記し如きは誤を亦多かるべし

一墓所一覧誤り多し證をもつて見るべし

一墓地に證とすべきは東都古墳志所見ども吉良義央に五輪塔に形をもて此出も正史と書べかれ

一此古墳志を傳写し煙木と既せし十巻に出しより全く同出し

一東都古墳志は近老が薑陰出度に義をもつて則亦本に世に流布せるゝ此傳写也

明治廿五年 三月 日

坂田 豊蔭記

野辺夕露

野辺夕露

欽義 月岑墓

坂田 豊蔭 諸遠著

海岸法苦寺に在り明治十一年三月二十八日死歳七十五名は幸成字は月岑号は松寿郎称は市左衛門世に神田雑子町に住し名を役す明治維新の後は中年寿と為り晩年には東京府に産復たり学記するも此類多し刑律に関係の書は警視廳に呈し外国に干渉の出は外務省に呈し余も外務省奉職中大概知電の依頼に因て此出の事は無り月岑とも屢談話して相知まり性清潔を好こ一日に必三浴す又酒を嫌ふて老に盛を手に寄る時は雑出を座右に置く夜白昼を續き朱を以自身著述する者少からず武江年表老曲類纂東都歳時記の如きは既に上梓して世に訂せる續武江年表は稿成りて上木せざりしを甫喜山景雄と活字板にて出す又江戸名所図会は重祖長秋及文縣舊地編述する所なりと幸成整頓して刊行す其情雅精密は他の名所図会に在て及ぶ所に

元 杏園墓

深川万年町正覚寺に在り文化八年六月二十八日死歳第五松山人にて江戸に来り京橋小伝馬町にて陽

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用

麻布麻尾老妙寺に立り天明二年三月五日卒行法名明心院殿前豫州刺史天愛ろ山大居士と云ふ豫州我
ハ若宗号ハ文麗翁豫州も亦号之某画道筆頗名あり五世の孫孤翁伊豫守泰都と以へり

武田 李仙墓

小川東海寺中央林院に立り宝永二年七月廿二日死李仙ハ幕府の侍道長勇院と称し法印に叙せらる大に至
る此名何り

山田 宗倫墓

浅草本願寺中吾竜寺に立り宝永五年四月朔日死年八十五宗倫名周学茶るに名を男子二人を長男山田
久張宗屋二男生弱椿平宗俊共に父に従て茶の事を受傳あり

田川 鳳朗墓

谷中天王寺に立り明化二年十月廿八日死鳳朗姓ハ号笠房對外と云ふ此後人にて江戸
に来り飯倉氏町に住し継潔氏宗匠にて来りて教を乞ふ老門に輪湊に定に近世名誉の俳人なり

小川 巽昌墓

中野宝泉寺に立り文化三年四月廿八日死道称美花巽術を以て名を新都にあらはし諸蘆の及幕府の小使
府下近在此農高号来りて教を乞ふ老衰なりしと

九光 利通墓

牛込宗町伊雲寺に立り利通ハ大田侍五名此流の道筆之名ハ利通道称稽古之門九光ハ其称号之五門に
入て教を乞ふ老幕府の小吏諸蘆の有筆役号此来り学ぶるに天保年間此相望雲谷安川陽谷等の如し係
本寺世に行はれしも無の師之

河津 定迪墓

地の端明寺に立り文化二年十月十七日死定迪ハ京都人玉画の鑒定神の如く曳尾庵に来りて食客たり
ならず最に久し睡餘小録ハ定迪の編之

湘名 貞雅墓

四谷勝行寺に立り宝政八年十月四日死行年八十一法名源子浣殿伊照日中と云貞雅ハ道称を源五郎
貞雅ハ名なり其を孤所形幕府の奥右筆を役し裏六葉町法眼坂に居て五百石此宗地を領しとり柳
営此旧記古格法令等ハ勿論江戸の地理神社仏閣の縁起古地の沿革等に精し大久保市郎右衛門
忠孝伊勢平氏貞史古田直治郎覃等と共に親しき旧記に精密なりしハ覃ハ四ハ貞雅の若し湘田宮

考證に新編江戸志の文人部にのせて知る人まれなり

松羊 雁奴墓

駒込吉祥寺にあり 雁奴ハ名を蘇 横橋通称萬屋市兵衛 元飯田町中坂に住し 辻番人請負を営業とし 狂歌を
善くし大根太木と号し 世の仲むかしつまりて山をなすハ いくや山まへあこまりせんといふ歌を開つけて
世に称せらる 家に狂歌流行のはじめなりける 安永年中四谷忠兵衛横町に田安家の小十人小島源之助唐衣橘
洲の家にて始て狂歌の會ありし時も出席せしものなりとぞ武江披沙に見えたり

栗園含羅文墓

小日向茗荷谷林光寺にあり 寛政十年八月十一日死 享年四十 法名深誉菖竜羅文居士 辞世 秋風や 松をよす
ぞけの森の露を称号にし 羅文ハ蕉門の伯先にて本名源良高久門共古法 ...
通の門下にて 武藏の諸国を経歴めぐり 俳諧の事をのこす 小伝中に詳なれど 千代子賛せんと思ひて 知らず 文
馬琴が家 彼ハ馬琴の母方の伯父にて 三章母方の子也 馬琴が剃髪後蓑笠と称せしハ 羅文か譲て號るなりとぞ
曾て著述説り 紀々や 落やと 知られ

深川元儁墓

本所如法寺にあり 安政三年五月四日死 元儁通称潜蔵 青年本業医を以て生計とし 儒学に長じ 文
章に優れ国学及洋学をも兼 蟹文を読み物産学に精し 実に多藝の人也

加藤枝直墓

本所回向院にあり 天明五年八月十日死 其祖ハ伊勢の産 枝直ハ初為直 叔て本町年行司の分家となる
享保十五年大岡越前守忠相に隷す 性和歌を好み 真淵江戸に来りし始 村田春郷が家に寓せしを 通じて 識
らひしが 後に神八千の郎党たる地に招き住ましめ 何くれとなく 和を流する人々 是をいふ 訪ね求め 厚く 款
しるおとろへ如 諸事を大に門といふ 枝ハ橋園とも 枝直者ハ號して 性嚴肅 能く人事を調練 或年の始
に 枝直真淵に家を譲る 真淵古都の詩を集開しところなどもおほけれど 真淵に對しては 衣装の制
ハ 古より有しとを 委事蔵に知られ 今世に出来 衣装を見てや 古論書 掲るに其下
古学を教へし温古人沈しても 古都の徒を用ひしかハ 年々の和歌に翻蘇 紀らしと 忠告せしとあて
考にハ生恵も墓国なりし 和学に仮目 歌集 東歌三巻あり

土肥允仲墓

市谷長延寺にあり 宝暦七年八月四日死 允仲名ハ元成 号ハ霞洲 允仲ハ字なり 松巖の剃髪名 通称源

国立国会図書館 タイトル『野辺夕露』 請求記号 863-231
ガラス使用

四師業を新井白石に受け幕府の儒官たり

原　叟桂墓

駒込吉祥寺中洞泉寺に在り明和四年九月廿九日死名は瑜字は公瑶号は尚房通称を三右衛門或は政桂とも云宗教の人之紀前国産庫城を水野和泉守忠光に仕ふ初伊勢京渥に就て学び後に一家を立せり又遠州を居られ　二男放仲名は恭流父の業を継ぐ大に名を寛政五年歿れ

林　諸鳥墓

下谷幡随意院に在り寛政六年八月十九日死家号始瀬通称和州又道樹号は林居士娘中務麿少路に居り後宗務横坊に移居れ尚時尚高大に国学を好こて真渕の門に入り紀記歌集を著せし人之天明年号伊豆国熱海の温泉に浴し居りしおふ日金嶽極巓赤山に登り彼十国不高を見し時熱海の陽戸浦辺某の勧に任せ山上に眺望の方角を指掌純石碑を建へ其碑文多賀城碑の文體に效ひ勤せし碑今尚山上に在れ

保守のおもしろきものは小山田与清も賞して松平叢話に載せたり高寺に葬し法名鈴巻道寿居士と謚れ長男長教通称和州と云ふ父に従て国学乃ひ保守を居くせしと云ふ

因に曰始瀬家の田家なるよしは彼家の由緒に詳之

宇田川玄随墓

浅草誓願寺中長安院に在り寛政九年十二月十八日死名は晋字は明卿号は槐園玄随は其通称江戸の人久保玄津山城を松平越後守康人の侍医之学を修むるの殊に洽し砥礪の名四方に雷る殊に詩を長くせ居る南郭の門人安道清河等とあらり年四十三にて歿れ

青島　椒里墓

本所中之郷成就寺に在り寛政十年六月十三日死名は再字は仲巳通称青島宗治郎幕府に付代庵師を業として本所横川所に住居す画を好こて画新出雅致可り椒里は其画号之名武江年表に雨に作る始し墓所一覧に従て再とれ

酒井　壺山墓

本々天沢寺に在り安永三年十月廿四日墓所一覧二月廿六日作る始し茂朝陸奥守業　本壺山は其江戸相良館を弾正大弼忠道十七代にて高尾氏に嫁し嗣子なりしは稲中守忠直の五男時に他忠如を養ひ家を継しめ後出仕下に叙し讃岐守に任せられ後稲中守に移し延享三年九月廿五日相良を辞し隆興国泉に移ると宝暦四年の秋致仕家を嫡男椎に進忠寿に譲り隠遁の名を仲存と改め字を璋壺山は其之五勤中に儒学を好こ尚時徳度中にて卓識の

名ゆかしかり

三宅 弓綱墓

深川新大橋松源寺にあり 寛政三年三月十四日卒れ 其国は三河之田原城主備前守康高 致仕後の號之 其子を
時覚斎主馬中より茶事を好み 松平不昧と並称へらる

松平 不昧墓

西久保天徳寺にあり 不昧は出雲国松江城主左近衛少将兼出羽守治郷 致仕入道後の號之 幼より茶
事を楽しみ 隠遁の後は尚是茶事に暮し 宗匠にまさり 平生好める茶器名物 寄合の具 好みの不知なるもの 文化十五
年四月二十四日卒れ 古今希有の数寄十八番を著せり 常に不昧先代の菩提の寺に碑を建 大崎の庵にて十六
羅漢の像を彫せしり 其能工目を驚かさざるなし 其部屋敷茶庭は大小諸侯中の並ぶ所なり 相比するものなし

松浦 鎮信墓

本所天祥寺にあり 元禄十六年十月六日卒れ 法印は肥前平戸城主肥前守鎮信（其所一覧鎮信は弟分にて候） 致仕後入
道して 鎮信と云ふ 儒書を読して 天祥寺と称れ 刑部卿法印の孫は先祖式部卿法印の例なりや 広く諸家読
偏覧す所なり 幼少より茶事を好み 大いに其法式の奥を極めしと云

本多 松翁墓

深川霊巌寺にあり 宝暦七年二月廿九日卒れ 松翁は伊勢国神戸城主伊予守忠統 致仕隠遁の號之 荻
生徂徠を師として 大いに古学に名あり 其父は猗蘭と号ス 大いに荻生氏の学を好み 又猗蘭とも自称れ

紀伊国屋 亀山墓

本国寺中浄光院にあり 亀山は文左衛門と云ふ 亀山は其号なり 文左衛門と称し 築地飯田町に住し 父が流を汲み能俳
人ならず 幽に暮し居たり 亀山は其号之 名を貞と 蜀山紀文が家の音曲業 宝暦年中に成長して其世に
て跡を引襲ては 名高く其始めは俳諧を業のやうにし 別号して 明雨と通称を改め 家業に従ひ其閑散を
こととし 風流に耽り 流石に豪商の流れとて 更に卑劣の所なく 安永四年に卒す 家を守るの器 人なし 千代
紀文が子孫絶果したりと云ふ

永東 石栗墓

本国寺中長寿院にあり 名は典 字は縣 居通称は 幼より文学を好み 性風雅にして世事に疎く 其
詩を作るを以て楽とし 其友と號を称せり 其著作を隠して 心に守りて 秋日を過ごしたりと 享和
三年四月三日に終る

千葉　周作墓

清原雲敬寺に在り安政二年十二月十九日名は成政祢は周作北辰一刀流劍術の師之清利又七郎の門に
修練して竟に一流を立神田松下町に居住を置き大に行はれ其門にあつて教を受る者甚多に満門

同　第二郎墓

同寺に在り第二郎は周作の二男父の教を受け頗る藝術に達し能法を柳川城主立花左近将監藤賢の任
大名進は其父近江東世上に擊劍家の第一と唱ひし進人まゝ男進も父の意訓を受親に劣らぬ擊劍の道
志なりしかども中川修理大夫の邸に有名の武人を招き試合を競ひ其家士男を蓋発せしむる時一仙と
すべき時進も出府中まゝ招に應じ第二郎と試合雌雄を試む和右ノ一本は進に擊退しかども二本ノ周分は
千角に試合に及びしを見ては進に格別優劣なる筈といへえこり惜むべし弱年にして文久二年正月死れ

松平　冠山墓

牛馬河福寺に在り周情を高原城主松平周懐守奇稷の分家松平長門守定保の父世厳院定光実は池田備前
守政宣守にて大隅守定得に嗣にて有りしとは書く家を継しめ高原城田一万五千石を領し従五位下に叙し
継厳院に任せられ豊宮の時は柳の男に伺候す夙く家を嫡男兵庫定興に譲り隠遁し剃髪して継厳の道

冠山と号し大に文を好り武藤名所考を編輯し文政七年株本に譲め世上に発行れ

半夏　忠憲墓

忠憲は伊勢国神戸城主半夏母法号忠永の七男称を甲馬と云ふ伊勢真夫晩年の門人にて方舟貞春に教を
受け武家実に精しく其著述の云も多し元来小藤氏右宮隠居毎月定格の費資もなく有ども其
年を倹素節約し毎月の費用金を以て出精を賭賦するなり文年依て毎月所発の出精数万巻に及べり忠
憲我在世の男は保存もすべきは殆後は是を閲ん人も有るまゝ無用あるべし亡後必沽却する時他勿うるべし
称るなり所ぶは他人何とか高るを無情なるべし評せん我集めしものを我教ぶすとも其我を評するに止まる
のことて其数万巻の出を一巻も当めず食べ沽却せしを以て其奇行を其行為評判せしと柳木泰綱の
語なり一斉人と云ふべし墓は雲岸寺に在り

春山母法守室北條氏墓

小石川柳町祥雲寺に在り永禄三年死法号俳光院殿花院宗順大禅定尼寺侍に曰罷基春山母法守
春山集人正之永禄七年甲子年正月ハ徳川公府長にて里見と戦死之年人正法名日演正同居士と
云春山母法守室は北條上総介息女之永禄三年庚午年辛未出寺に葬俳光院殿花院宗順大禅定尼と云ふ

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

依て寺号を浄光寺と号れ寅承年中浄光院様御寄号に帰りて祥宗寺と改む云々是を以て此人に対し五年以前に北條氏に死し爲に高寺を建立したりしなるべし

三島　自寛墓

浅草新橋吾恕寺に在り文化九年四月廿六日死年六十八名は景雅通称吉田清宗稿三鴻郎に住吉玉学を修し和学を長くし且能出来名あり

縣　宗知墓

小谷廣徳寺中梅雲院に在り享保六年二月十二日死す宗知は玉泉子と号し業を建するを以て四方其名を伝へ学の門に入て業を成す者の礼法を修学する者なり

森　平祥墓

根津本寿寺に在り寛政十年三月十二日死す能出たるを以て右史選挙の時括擢せらる幕府の表右学に於ける勤務の余暇久保若太郎寛文の方芳我又右衛門の旧制に関録し幕府の文の雅哉を改めしが年暦を重ね大に文法変したるを頼る旧格に法とり一層文格を改めしは全く其詳に功なり且是出の名世上に高くし

小嶋　成斎墓

駒込長元寺に在り成斎名は知足字子弟通称小嶋五一号は成斎一号不惑道人備後国福山城下阿部伊勢守正弘侍学者に名あり弘化元年廿一日高蘭町出使節私担前に長崎に渡来同ひ四月同処を行ふ事に於て近日せし各国交際貿易を請ふを許可あらせば必兵端を発生に於て国害なるべしと被出来より忠告の出願に基ふ執政連署の回輪成斎に合し志りしも尚時正弘執政学政なりしより其家士を学ぶに合したりしまも何るべきとも早竟幕府の在事にも成斎に猶る遺学なりしに依て之を以て成斎の学者名高なりしを知るに足れり文人三年死す

大巖　伯俊墓

今戸湖江院に在り文化二年四月廿六日死享年四十六毛頴工を業とし学を制作するに不必後は奴技を得たりしかは学を弄ふ文人墨客伯俊の制は唐学に猶ひ是を掌る者は寺制学院に受竜を出すと今日毛ふ是他人の制学と異なる所奇妙之市川寛斎生花堂の三家を云ふ伯俊頭首相謝し難陽に之を高額に掲げ以後制毫の法にも生花堂を用ひしとこそ

椿岳　道平墓

神奈川金龍院に立り安政四年八月廿八日寂す年九十五年八歳京大護院二十世権僧正に任せられ能筆にて
名都鄙に行はれし

河竹能進斎墓

淺草南松寺に立り河竹は号通称新七安永天明の年号有名の狂言作者にて彼世に名を為して樂(フタガモテツキノスカ)月姿
(タエ)絵を能せし俳諧宗節の作者之俗に忠貴といふは此院中のものなり是和代新七の能進斎は一世中の妙案妙
作之

儘田重明墓

谷中天王寺中の信寺に立り寛政七年八月廿九日死名は重明号は梅柳軒称は五水上野国松井田驛の
人之和学を好むる多年堂々京師の歌人俗語月は備後の福山人にて京師に来り此歳に至て佛学を
修めしも漢学は俗語不如法の所行多く到底一家の衆徴明之と歎息し密に諸学は俗語に適も生
涯を安んずることを思ひ其武者小路家の門に入て是に学者の精妙を得諸学擬要逸多く年毎四天王の一意と
称せられ其学術実に思神をも感せしむる程幽黙之今洛東岡崎村に立り其年毎人の歌はしく遠く上
京して国際の解答を考に至り其教を乞ふ評月雲志を感し懇に教授し竟に諸学の精功を得諸学の来
り大に行はれしは年七十三にして歿す

嬉京多助墓

淺草八軒町に立り多助は嬉京氏にて上野の利根郡沼田の産にて僕に来調二百文を携
江戸に出辛苦勉強を積て一家を本所相生町二丁目に発展し新宿を販賣し豪富となり地面廿四ヶ所を
所有し天保年号と五代相續せしに栄枯得喪は免れ難く今は其家断絶し僅に高寺は墓所にて名称
をえらのこと墨田面に教人の法号を与へこと以て其経歴は此の歳号は「本所にあらざるものは二ツ五律鎧
大名貴宅嬉京是を以ても其家は盛なりしを知るに足れり近年此多助の一代をこ遊宇同新に諸話
すらは前に云ふ一世の勉強に附会し大法師を知らしは来たり語ずるに足れば彼人にて勝負は紀伊国屋文蔵
東門は一世に栄枯を見し多助は栄を不世に情人世運の正しき時来りて天保年号に至り枯を極めしは今
多助の勉強心の堅固なりしに依てなり

井上正識墓

谷中天王寺の跡墓地に立り禊教社門中新に依て三宅清右ヱ門此没葬せしに井上正識は神道大成教禊教の
能にして梅田村に教場を設け当て神祇名の正義を自らなし其教法の正説を講義す聴席生説の精を九
ヶを感し諸侯の内及旗下の士を始都鄙の大に信し聴席目を追て漸次輻輳す中世より神名のみは行勢

祭之神祇伯白川家並に神祇管領吉田家の事家に於ける例内諸国の神社を統轄するものとし旧幕府に於ても其先例に従せ事家の所轄に附し並に法令をしるが白川吉田家に一流を立て神教を説くは異端なりと視做し其に操縦し定に捕して擬に下して罪決して其後に配流せらるゝ国民法令を消滅しを明治の大御代旧幕府中の罪人人を殺す時罪ひ者の分は一回敢克の勅令を蒙りし時其骨を三宅治右今代地に遷し梅田村かに一社を建立し井上神社の祠号をかけり遠志空しくして其教法を信ずる者都鄙に多く大成教授教院をも事所二箇所十箇所に設立し信徒相集て貴賤に正識の教を廣くす華族市民家の如き教祖の家の信徒なるを今特掛り実に其教法の隆盛なるは偏に正識の徳之

法谷長老墓

青山長老は丸ゝ旧幕府中松前家の邸内に小さき塚あるを塚上に松林蘇蔭と生茂れり傳云良安の筆写と此地に豪写の老あて是を尚所の人法谷長老といひしとゝ江戸松前に法谷長老の名宗順といひしは何に據りしかは青山恩田松平安藝守下邸中稲荷の社前に古き石橋ありしを其上に康暦二年十月日新田郎太史と誦りしかは古信は是を法谷長老の寄附といひ傳人又法谷百住所旧幕府中國郡の名を御書局の邸の近傍なる家國郡名浪寺長慎の別荘の道を写民廣福といひし老の宅地なりしと云ふ相見が四郎太史廣福と称しかや

詳ならず所出なし

関岡野沙良墓

駒込大円寺に立り天保三年十月廿六日死関岡文樓第八称号之名は豊沙良字は関字称は長老の門に江戸屋沢町の人装束師を業とし生質和学を好き吉井宣風に従て学ぶ又傳に地理学を好し名所旧跡に精し文政十二年祝融に罹り名所の程度十巻同別記百巻案福成しを鳥有となしとり嗚呼天なる哉今なるに今又悔とも何は益なりけんと是より学研を捨し共閑教に世を消光す今世に傳ふるは国民雑記標語の三行年二十一にして歿す法名受樹芳山居士と云ふ

関口黄山墓

山田向金剛寺に立り近来二年四月廿六日死黄山名は忠貞字は世篤通称貞助法嗣平に改む享保三年二月二日山名川に生れ学を好き数に修地に志し意に上道出家の名を得たり日本橋深世小路に結庵し惟を下けし生徒を教授し四方より漫来て塾を納し教を乞ふ者猶漫す弟年程今年二十八歳にて遊す

二位春日局墓

湯島麟祥院に立り春日局は新宿内部の利三の女にて稲葉佐渡守正成の妻なり有名て離別其妹とす

浅草遊行寺門内和尚の墓 寛政の改革の際、門人等が師の為に建立したもの。表面は大きな自然石の墓碑で、裏面に建立の由来が記されている。

鎮西蓮光寺の第二十三世、正化元年十月寂。正化元年、西山善導寺二十世の住職伊蓮社を号す。

若年天折等より義中宗の人名濱物と共に宗人數條を彫る。巨万純賊を累積し、戦争人を害ふ大将閥の為地獄の苦患を受くる事を顕徳院一顧の所為也。

下谷金杉西光院二世、寛保二年十月寂。享年七十二。法号顕徳院一顧弓阿。村田氏。

行業年徳のすぐれし事、村田伊兵衛のごとし。病て天せしより、歌よく人の果敢うるところを感し、能く書仏を勧めて、諸人悦楽を作導れ、実に近年稀なる頑徳かな。牛津領の行業の伝を記しても、千載に埋没せん。

牛伝長谷寺より春永二年五月廿九日守部が本氏北国家系を述べ、幼名を稲伴猪の妻として日光石中寺を駆け巡り、初め御徒を務め、梅屋と号して浅草茅町に移り、表まで浅草茅町と号す。

また事所を移すこと六度、その見識を立て本居宣長の所説を弁駁し、家の学を樹て、後世の為に一家を成す。宣長の考証は三種の遊化のごとくそれ

ずして遊化のごとく素盞嗚尊を論じ、又外宮の祭神豊受姫神と天照大神の関係を論じ、国学の源を尋ね、その説宣長と相対すべく、甚だ卓越せる中に神乗

惟馬朱入侍の世人となり、学を好むこと、守部の如き者、一所に八一條、稲掛葉良の徒を数行せしのごとく、少きすべからず。我が二年後馬は二千石を減ぜられし罪を怨むことなく、

又学業を続ぐ国学を勧めて、弟子

阿佐ヶ谷 記念墓

浅草遊行寺門内和尚の墓 寛政の改革の際、門人等が師の為に建立したもの。表面は大きな自然石の墓碑で、裏面に建立の由来が記されている。

堅草上人墓

鎮西蓮光寺の第二十三世、正化元年十月寂。正化元年、西山善導寺二十世の住職伊蓮社を号す。

第地 義中墓

若年天折等より義中宗の人名濱物と共に宗人數條を彫る。巨万純賊を累積し、戦争人を害ふ大将閥の為地獄の苦患を受くる事を顕徳院一顧の所為也。

村田 弓阿墓

下谷金杉西光院二世、寛保二年十月寂。享年七十二。法号顕徳院一顧弓阿。村田氏。

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用

俳字の書き早う句業家の号を一枚宛摺て出し候を常とす風
年僅十四歳の時より俳諧の興味を覚え世事を顧みず専ら風
流を好む享和の頃より遊歴年来肉食を絶して酒を飲まず
脚気を病むこと数年にして剃髪して以来病全く癒ゆ
一切俗を避け閑を楽しみ初めは法衣雅服なりしが
今は神の如き一の袈裟を着るのみ
由一流を立て全く馬生と別流を立つ
門弟野越谷辺田畑抔若干
元祖三遊亭円生墓
演芸会社より三枝亭流の元祖高弟として高名あり
しかども一の袈裟を着るのみ
由一流を立て全く馬生と別流を立つ
門弟野越谷辺田畑抔若干
代円朝より曇喝家元を称するようしこと

元祖三遊亭円生墓

演芸会社より三枝亭流の元祖高弟として高名あり
しかども一の袈裟を着るのみ
由一流を立て全く馬生と別流を立つ
門弟野越谷辺田畑抔若干
代円朝より曇喝家元を称するようしこと

佐川領農業を廃し専ら文化九年九月十七日家を
町辺を往来し俳諧を売りこれを以て業とし

演芸会社より称号を与う明治廿年一月十七日没根三は河井継之助
出藍の名ありて廿四歳の時初めて春鳥を
り駆馬を乗一回廿年ぶりに帰国して

勤退官後ち帰国し明治三年七月廿九日死す死後
領守衛隊軍深尾家より出で仏道に帰し書を
よく和歌を詠じ晩年家督を譲り隠居
とくて業俳諧に専ら風雅の交を厚くし
る文化十四歳の時より俳諧を学び

演芸会社より称号を与う明治廿年一月十七日没根三は河井継之助
出藍の名ありて廿四歳の時初めて春鳥を
り駆馬を乗一回廿年ぶりに帰国して

勤退官後ち帰国し明治三年七月廿九日死す死後
領守衛隊軍深尾家より出で仏道に帰し書を
よく和歌を詠じ晩年家督を譲り隠居
とくて業俳諧に専ら風雅の交を厚くし
る文化十四歳の時より俳諧を学び

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

於是浦賀に渡来せし下田に碇泊せし時長門藩士吉田松陰等彼の米艦に乗らんとし浦賀より便宜を
求め米艦に至り同行を強ゆ十のとおもあらき語せん意猶の甚安に其伏する依て之を捕へ江戸に護送す困て我
邦の崖を出て終に密田屋に預らしも本所の罪あるを免ぜし後放免せられしは之を育て茶を
の如きも年僅に二十一にして死

六代目市村羽左衛門墓

本所押上大雲寺にあり天保五年八月廿七日没法号院家橘其が流行の狂言を名
とす作者と称し文化の初め宗家の浮劇に長じ後名行う嘉永二年十二月堀の中村座に
節のかけ人形の所作事大に喝采を博し此良行に新身連中三枚續の狂画若二百枚売出
其物の好也し俳句数吟をえたり

楠不伝墓

吉田小世坂にあり楠不伝は寛永年間の人にて楠流の兵学と称し多数授けたりしに彼は学
多し由井正雪丸橋忠弥の叛賊不移此門に入りて学びしに此地にて暗殺せらる
り墓を書に信じ難し此墓ある横に今直傳小笠原共に有るの建てし大來好
典の僅碑のみ

石塚豊芥子墓

浅草龍忠寺中常宗寺にあり文久元年十二月十五日死享年六十二豊芥子通称石塚重兵衛字
一に集古堂と号す神田豊島町に住し桜餅を業とす二世長女に鈴を娶此業放蕩にして雑劇
し頭代の未清門海の浮に溺りしも其後家風之年同族浅草西側の角に移転し雑劇の筆を呼び
従前の粉を落ぶ故に芥子園と人に呼ばれ好んで稗史中の鳶を考へ古本を好み先哲家を
訪ひ稗史作者の徒と交るいは文庫中に蔵せる求むべき芥子園本として世に行はれたり

二世為永春水墓

下谷養玉寺にあり明治十九年九月二十三日死享年六十九名近房称染崎久次郎と云ふ為永春水八年
年文鉄墨亭の別号を称す旧対馬守府藩士対馬守の康士なり壮年より小説を好み初代為永春水に従
弟子となり春笑と号し後師名を嗣ぎ二世春水と改む明治維新の後積文社の編輯長となりしと云
の趣きなし最も名世と云ふ

鶴亭文京墓

谷中天王寺にあり安政七年二月三日死享年七十二八文京は画家東條琴台の長男にて近年ある名の傳せ

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

東條堅壽の見之仕年より演劇を好き四代目鶴屋南北門に入り相言作者をなりて若竪魯助と云す相言
とも出しく文学を以て却つて其識なし本業を妨け無量の脚色妙なるぞと自ら見りて劇場を去り
小説家と成り多く他人の代作をなすとし西遊して四国の後浦原等所に住居して一号を代作者大翔と
よへり相言作者の代表園春色巻三十三号士号代別号を曉年老零して徐川佃の寓居に殁せり門人魯
文京鶴写権を舁て葉黒水に送り其遺骨を永久寺に埋葬僕に標碑を殘しが上野戦争の際砲丸飛
来て其小碑粉碎せり依て此ことに魯文写二世文京と計り口地天寺猫塚の傍に碑銘再建近日に行り
法名鈴峯魯誠居士といふ

會津侯侍女赤裾子墓

本谷廣徳寺に在り赤裾二年八月二十九日行年十九歳赤裾子は陸奥國會津若松城を松平把後守容保の夫
人附の侍女之夫人は松平駿賀守齊恭の妹にて仁心深く侍女一同に其恩を見し悲なく若遇夫に行るもの
可きは懇に將来を諭し是を比喩するなるべく実に文可るべしとも出はまざる賢婦人なりしかは給ふ此
侍女其恩澤に浴せざるはなし彰評琦行紀徴此哲婦なりと雖天寿限りつゝて赤裾二年七月を逝す
數多の侍女其永別を悲ざるはなし中にも赤裾子は甚く歎き歌に進菓の脇胸に遍り弱死せんとすを請

ふと雖も弱死は天下此嚴禁若是を違犯す無可きば主家に其責を来らさるを此法令なりと説く許さば
今は為方なく忘れ世まりて同八月二日自己の親屋に自害して死しかりしは全く弱死の素志を遂しく

小野蘭山墓

浅草誓願寺に在り文化七年二月廿七日元文年八十四歳云二十七歳は職博学は以文尻芳彩朽瓢子号此
兵行り胜は結帕称号は小野通称本内と云ふ京師の人松岡玄達に従て本草を研究し物産学に出藍此
名行り父は従四位下主殿大允兼伊勢守職義二子行り長職兵父の後職を襲き兼は蘭山に江戸に徴せ侍
給政定地をあらしむ有命して本草を講し西宮の師等に教授す要法を採集す其出室此内典籍羅
列葉原稚玉怪石草木の花実羽毛鱗介出穴の属を陳列し古出画古墨洋舶の諸家を並蒐し蘭山僕に
其名を家を容せ几座勅前詩を賦し尚を唱く自娯す多紀元簡一見し殆神仙中の人此如しといへり是を
以年来此の状を推し知るべし

井上文雅墓

谷中吾光寺後玉林寺に在り明治四年十月十八日行年七十二法名文雅院方慈妙道居士名は文雅称は元真
家の号を柯堂と呼へり田安中納言要に相々の侍医之俸給稟米四十五苞と云く此年より和歌を好こ初は岸世由是

流に学び法ハ一柳千古を師とし皇国の学を修め文を詠ずる詩に于長所にして其に古人の家集を
書て使す其実ハ勅撰の家集ハ撰者所校に依て取りこゝろものなるが詠者ハ稿ゆで得意なるぞ其撰者の
人に其とえるもの所て撰集に載せこゝろものにして詠者其家に居ることなんにハ得意也文も何り思ひし其
を思ひ撰集より家集也方に書てこゝろ有り何ゆゑ文也数文何もなれば作者の真面目を見ハ其思と
ゆゑ家の集を読に如くなるしといひて自分ハ詠者ハ新古今集以来の実作の名詞を流に詠これを
を好めハ今や流也すらうに一首也新いとこゝろもし見りしより世の人家相以後の文人なるといひ何ゆゑし
なり文雅ハ長袖の人に似合ハず其を時より任使の流行りて我妻を欲ふず人の困難を救ふる事之明治維新の
物業陞職校ハ著編訊歌新学に文雅の詠者二首を載せたり行来の物をも今ハなりけり思ふ今代田
を人にかちまして徳川の濁りそこくと遠徳川深き名を世に流しけり此方の物に一直宮の嫌疑を蒙りし
うども此詠者に幕府の瓦解を観察しなめるのこまて他に謀り企てしるゆゑに何ゆゑ蜀都もなく鏡
の雲まれて白日晴天の事となりしなども其後三年を過ぐ見にまたるくなりけり

阿部備中守正次墓

浅草新橋湯西願寺に在り正保年十一月十四日大坂に於て卒年七十九遺言に依て遺骸を浅川
湯にて火葬骨灰共に浅川に流捨骨塩一ツ二ツを持ち江戸の菩提所高寺に埋葬すと寛明日記に見えたり

良弁 信正墓

多摩郡長久見村東渕寺に在り此古墳所在の地を経緯峯と云ふ其墓標に植たる松の老樹を三光の松と
云ふ今首案年代旧晦なりて武州に流路に見えたり

子柄 菊旦墓

深川法禅寺中南龍院に在り享保元年二月二十五日通称仙右衛門日本橋西河岸町の名ありて大に業る
を以て名行り又俳諧をも居し西極流雅の人なりといへり

法忠 和尚墓

小石川指谷町円案寺に在り宝ア九年九月晦日に迂化法忠ハ幼稚より頼に仙天を信んし仙堂の前を通
りハ必ず乱せざるハなし又如其弱者の児童に異ふに患しいまぐいまけなる所より仙門に入れ当仙経
を勤学させしも幼年より居て説法をなす言語を其流なく如く史者蔵せざるハなし故に俾名して
今仙法と称す人其長年に稀なる徳行を信し均依す法忠を能湯し下総玉造乗寺の荒廃を見て思
く頼て勧化して再興せんことを謀り四方の長男長女奉持して見て再興を功を遂げ又造乗寺を去て諸

浅草新堀龍宝寺ゟ五り宝政二年八月廿三ヶ死川柳ヶ同所龍宝寺門前の家を売て橋井を移
を八右ヱ門と云ふく俳諧を好てやゝよく墓心ありしが感する所
あり本俳諧を自作しおるをこの風調を穢ふく今一層俳諧をはげ
俳諧風転句を発すべくして立吏一吟ゟ人をしてた絶倒せしむ
門ゟ入る志ゟく名一流を為すあるもう西風流俳諧悉係ゟ宝風調の
むとどす元祇を志ゟく普教を励ましめ、処を問ず墓霊を覚ま
元祇の年を繋くを以て行代目川柳と号す依ゟ記ゟ

四車大八墓

深川黒江町同連寺ゟ五り文化二年二月ゟ病死す彼文化二年辛酉の
ゟ月清ゟ申（此名ハ多分男名ニハ不載ル為不宜ゟ）喧嘩のあるゟ四車の名世ゟ墓ゟおるゟ
ゟ傷ゟ永機ゟて男附ゟ元ゟ此年二ゟ死しおるゟ也ゟ杉田五十自村の者ゟて行業医ゟあるゟ

我見老人墓

駒込浅ゟ打里俗ゟ云ゟ吉祥寺禅ゟ五り建保二年三月廿五ヶ行年ゟ十二ヶ五ゟて死ゟ孫孫我見傍ゟ人大小義勿後

起

号ゟ元宝暦ゟ頃ゟ誹ゟ自ゟ此ゟ歌ゟ仏ゟ法ゟ一趣院真心律入居士彼著ゟ相応の著述あり

駒込 若狭稼墓

深ゟ田南華禅寺ゟ五り天的二年三月廿二ヶ行年ゟ十六ヶ若狭稼ゟ振ゟ芝ゟ宮神
ゟ高ゟ娘ゟ文ゟ門人ゟて宝多ゟく娘ゟ宮ゟ政ゟ文ゟ敦美大夫ゟ云ゟ号ゟて宝多ゟ
ゟ宮ゟ写ゟ取敦美大夫ゟ改ゟ後年師ゟ五ゟ名ゟあり後ゟ朝日敦美大夫ゟ
八年敦美ゟ政ゟ宝ゟ勤ゟ慰美ゟ改ゟ文化ゟて宝狂撰ゟ改ゟ相門加賀大夫ゟ
田屋ゟ劇場ゟ勤ゟ後ゟ行ゟ後薙髪ゟて宝ゟ名ゟ牡丹ゟ好ゟ花ゟ多ゟ集ゟ

川上不白墓

若中奉ゟ寺ゟ五り文化四年十月四ヶ死ゟ年九十三ゟ不孤斎又同所秋娘ゟ
茶法ゟ名ゟ五り多象表宗旦四ヶ江ゟ宗結ゟ宗四ヶ良休宗佐ゟ伝ゟ宗
心斎ゟ伝ゟ此心斎ゟ不白ゟ伝統ゟ江ゟ於て千家茶道ゟ中興ゟ人ゟ
小活大梅墓

深ゟ寺中修行院ゟ五り天保十二年十月廿七ヶ死大梅ゟ江ゟ人ゟ和名孤山大梅居又剃髪号ゟ浩ゟ行ゟ又

八十歳地蔵尊に居まりて元市川寛斎の門人にて儒を講せしが於て能諧を為さしに鄙人中の学者も亀田鵬斎
或は子は漢学者士なるべきや能諧に入る事を示しとするや大梅微笑して河豚にて殺人にかいまし河豚の
味勝斎も此答に感じ是より勝斎も能諧せしが文梅にハ為がたりしと云

大思 梅隠墓

本々興安寺に在り嘉永四年五月死享年五十五道称ハ亀治郎 梅隠ハ号也天明北西曇別如霧西亜号へ漂
流し寛政中内親せし伊勢國白子の舟頭幸太夫が子也文殺して後市長に在ましけれ家の衰てし時大に
悲節を尽せり幼より読書を好こ文化営業に似ず大に文学に長し後年板田所左衛門上小宮山敬之郎 昌孝が
邸内に住居し儒学を教授す称号を大思と称するハ父幸太夫の家船大思丸にて而も其船頭なりしを
以て永く其事を忘れざる為に大思とハ称せしと生質温順毎に仕へて孝あり時代人も孝養の你切を称
賛し元船家の家に生まれしに似ず禮義正しく考且ても深厚也行状なく名利を厭ひて世の人に交らず
其に其名をだに知る人稀也死後事蹟を諸して斗島長命寺に碑を立しとり其名を人も知るに至りし

諸木 名彦墓

浅草教学院僧に精寺と云に在り文政二年九月三日死年二十一名彦ハ夏州仙台人本業画也白雄門人
にて金令舎と号ハ十時房とも云白雄の遺言に依て江戸に正風能諧を擴張す後名彦栄兆を以て江戸の
三大家と称す栄兆が参宮するを見別に送りて餞別の文に帰ことなれ栄兆ことなれと賣来る交の栄
兆とまれときこゆるハ別をおしむの情と云しにても文才也ゆるべし名彦も新朱考の目にて云浅四十年未五

二世 森屋万象墓

二年板上行寺に在り文化五年十二月四日死享年九十五性ハ中京名ハ中良字ハ廣臣号桂林初称ハ森嶋甫斎といへり
桂川甫周法眼月池の寺之蘭学也ありて年賀施演と居し其後世上一般に鉄英也冊子流行施演其英述五
作号森屋万象といへり中良も明倫に同じ鉄作の書発り施演に教を受ふ施演諾し天明四年今禅史の作五を
添削す後に施演世の号森屋万象を譲り又後年二代目風来山人とも亦天竺老人とも以て和字をも読て
作名を行状為軽と云蘭学ハ家傳にて君に紅毛雑話写此作五て大に西洋の事を知るの捷径なりしと今斯
西洋に通船の人多く親しく実地を見るに至りしとも其時代にハ蘭人僅に長崎に渡来せしのこなるに雑
話ハ精密に感ずるに至りしと

三世 森屋万象墓

葉地本願寺中興延寺に在り天保三年七月廿二日死享年七十森屋亨又南湖子の号五代 作者小伝にこれを二

質に作るは誤也森羅万象の号ハ平賀源内が号なりしを森島中良に譲りたれば中良ハ二世なり自称之又中良
より南湖子に譲りたれば則三世也二世を作るハいかなるゆゑにあらずや森島中良ハ竹杖為軽の号を譲り後更
に森羅万象を譲りしと也森羅植右仁右衛門といひし薬種商之

内田玄對墓

浅草唐松寺にあり文政五年四月四日死名ハ瑛字ハ廷璧玄對老人と号す又林葉斎と号す与世之宮
人号称法号を称す後年内田ニ改む傳画を業とす中山の子孫也享年七十四

石川豊信墓

浅草新寺町正覚寺ニあり天明五年五月廿五日死名ハ豊信俗称糠屋七兵衛号ハ秀葩通称糠屋七兵衛小伝馬町に住居
旅人宿を営業とし石川雅望の父也当時流行の狂歌を詠し狂歌の号ハ石川壮蔵といひしハ狂歌方哉
集ニ見えたり家業ニ似ず頗る謹厚ニて家を修め若年より錦絵の画法の行状なく生涯娼門酒
楼ニ往かず大ニ卑行の存さる所も雅材あるハ西村重長の門ニ入て絵画を学び室内の所画の紅画多
し殊ニ娼楼晴酒楼ニ登らざるニ能く男女の風俗を描したる一枚絵多し又画く絵本も許多あり墨
画也出ニ此裁迹を見るニ筆勢高雅致ありて当時の浮世画の教なれば

片岡直次郎墓

浅草小塚原回向院別寮ニあり天保三年十一月廿三日死綽号直侍ニて名片岡直次郎ハ旗下小給の士の
抱用人（所謂渡り用人）片岡某が次男ニて寛政五年癸丑の生ニて生得狡黠無頼の行状父兄の教誡ハ馬耳東風ゑ
ニ用ふる耳もろく悪行状果さて為方尽きて勘当の身となり家を逃れ破落戸の群ニ入賭博を
業とし或ハ騙掛偽筆等の悪事ニ身しき番附の表坊主ニて小普請組ニ貶されし河内山宗春ニ従ひ匪辟
となり種々悪行増長せしが文政七年宗春始め同気食く捕縛せられ入牢追々所由未禁決するニ至る
さる以前宗春ハ揚屋ニて病死し其余の連累獄決し一同死罪ニ処せられし中ニ直次郎と湯島山岡福寺前
某比男大工職某市郎の両人ハ不測自死刑を免れ但ニ入墨の上中追放と為ありしニあふれ直
次郎ハ獄中ニありて同類の為病を怨ミ看護せしを奇特なりとて青陶五郎の徳を受けし仁恵な
て更ニ其積悪を後悔し其の改心して白洲を立去りしがいかなる狡計を以て身を偽り立帰りしや後年猶
猪の小者捕所世組の若岩次郎の周旋ニて飯田町中坂下ニ仮商売業を為し救免の仁恵を謝すとて幽
町奉行筒井伊賀守北町奉行榊原主計頭の役名を二幅対の軸物とし床先の壁ニ掲げ神酒を供へ朝夕ニ
礼拝し恰も正国の本なりしが生得の悪心再発（再発）し強迫の悪事ありて又囚はれて獄舎ニ繋がれ礼問ありし年再犯

教されたるは法律の定まるに天保三年十一月廿三日発に死罪に處せらるに于時年三十八に定法此如く既に小塚原に於ら
れしを直次郎の情婦秋吉原江戸町一丁目大和屋の娼妓三十歳なる本名なほと別友陽信故名宗治郎此等の親者中
写伊佐伝右衛門の為人非人に頼こまれ殺を請ひ受け浅草小塚原なる四白院別寮に埋葬し墓碑を建て弔ひし
三十歳の女目も伝右衛門は近て実に付此人となり路帰ふ人もなるからず彼等は宗治郎例の江戸漢の使気にて
毎年盆暮毎夜にて御金年四月には幸信仏を建て華絶せりしかいつ此の分かれ名碑の所缺け失せ直此一字
のこ残りたるを彼宗治郎と称情小母ゟ男二代目小母宗治郎と呼石を称親なし古き墓石に添て明治十四年二月廿日
再建せ墓碑左の如し

宝国信士　　俗名直次郎

天保三辰年十一月廿三日　　湯島天神おまつ所
元施主　　伊佐伝右衛門
三十歳　　[illegible]

明治十四年辛巳三月再建

旧情を棄ざる侠客の義気感すべし利子云宗治郎老爺は年来無縁の者の罪の名に刑せられしを其罪に恐
むべし其人は恐むべきにしてこれとて深を弔ひしなる為人なるを知らず

白柏子静墓

寺柳村の内字松永と云ふに在り日光道中栗橋分西に入る四五町許に杉の老樹を着たり此杉を静の墓
標之と云ふ寛政年間一基の石碑を静女塚と勒したり此地分高川渡を隔て中田宿光義寺といふ是
刹に静女の寝衣といひ伝へし什物あり往古利根川の今の如くならざりし前は中田此光義寺も寺柳村
にあるて寺柳寺と号し来りしを流れ及び遷移より中田に寺地を移しも号此文字を幸龍の字に更めし
と云此地は文治の年間なれば隆慶に此駅流れし故静此地に来りて寺館破れ荒僻にこゝにたりと唆
て大な悲歎し竟に死去したりしを土地の人あはれこ此杉此下に埋めしと古人此石碑に伝ふるなり

四屋殺旧跡

粮所三折屋に在り再度此に慶長此地に吉田大倍亮と云人の屋殺なりしを二子五百坪の所を御用地に上る其
辺を吉田屋殺と云しに寛文年中青山氏お所なりて其後其後にて青山氏も断絶せり其所此にあるなる由を記せり
梅ゟに江戸孫子に牛込此門内とするは非之粮所三折屋にて元は木氏の屋殺之殺を吉田屋殺と云後に青山
将監と云人の屋殺となりしと新編江戸志にいへり

旅女玉菊実墓

浅草新ち所光威寺に在り享保十一年三月廿九日死す享年二十五玉菊は角所中万字やの抱妓女之生意賤しか

たりし丹後守時俊が孫にて世々幕府の士五百石を領し初ハ浅草(?)に住せしが後本所割下水に移り其後同所外
浜(?)に移す書を狩野栄川院法印の門に入て家流の画法を学ひ玉蘭(?)と号し将軍家治公絵画を
好せられ絵具役の小納戸へと徴出されんと人選ありしに栄之を選て抜擢せられ小納戸に徴出さる殊に上
意に適ひ日々君側に侍して絵具を解調進す勤仕僅に三年にして病に罹り不詮勤仕に耐難きにより依て時
小納戸を辞し男和三郎時豊に家を譲り致仕せんことを請ひ許可ありて隠栖し長病閑居の中に在りて性
頗るをかしく狩野家の画法を尚ありし雅風流なる人にて勤仕の身なればこの心の赴くところを画風を学
世画に移すべしと文龍斎の画ハ古流(?)浮世絵をも兼ひし文龍斎の名と文龍斎の文字を採て鳥文斎と号
また浮世画類考にいふハ何に據ていふるや文龍斎ハ春(?)の風をうつし稀工夫を凝らし浮世画一流を画き
大に名声を博したる以て一に婦人画の一枚摺大に流行せしかども寛政の改革に際し假令隠栖の身なりとも
旗下の士として浮くる婦人のうつし画等を画くたるをゆるすべきにあらず故に松下木(?)を画き繪母子等を画くハ高尚なる妓
不為なりと断然これを画くことを廃したり栄之天質の印を書いりしるすハ寛政十二年国因(?)妙法院宮(?)閲
東下向の時栄之の画を召されしハ隅田川の風景を画て呈せしに宮殿(?)御気に入後桜町上皇の叡覧に
供へ奉るに上皇ハ嘗く画を好せ給ふ御事故に其景色を愛賞なりて遂に長く叡蔵の事となり御画を賜ふ由

らば家に傳すること行儀正しく貞操高潔の婦女も尊しもろ共筆勤の名の花咲と目一ぶん日々三絃の藝
に世経て河東節の浄るりを好み年来琢磨して哀情を懸しといへり新風流なる上品なるに家名も競て専ら
花ぶ花に妹合葉やの楽器大様なぶ花の名手に年経今もして十寸見万寿やの楽備は及ぶ葉やは千代を
惜まざるなるべし故に寛政三年にあるし同十三年七月玉菊が追善の為にて仲の町の茶やも家毎に紅挑灯を
軒に掲けたり因て青楼雑談にありとて両傍文庫と三養雑記に載せたり是に起因し毎年ふ毎年
七月の燈籠をともしたるとも文に新を變しあるに燈籠ともし燈籠なる名となし燈にて毎年を迎て
閏飾して花を競ひ初ハ玉菊が追善にせしも後ハ客を衒ひ延くも一景なるべくなりし也明和の年か京傳
百ぶりの句を俳諧鶴にも出しけるにも見えるにあるべくも来る夜もあはれ是れ情の燈籠や玉菊が
遺骸を埋葬のところハ浅草田町十寸見蘭洲実弟(?)庄(?)の印といへる葉やの主竹婦人（竹婦人ハ京都乾什の別号ことにいふ大なる傑人全く別人也）
にあづまの調子を聞せし河東節の浄るりあるも載せて諸もに知るべきに此後ハ三養雑記にも載せ
とも竹婦人ハ乾什の号といひしは定成(?)誤也

細田栄之墓

深川霊巌寺に在り姓ハ藤原名ハ時富（浮世画類考後富字誤之）号文斎栄之と号す通称ハ細田弥三郎寛政(?)年官(?)に勤(?)

めさせ給ふ。天寛政の印をおし、かうかう讃ふる時文せしうち申安をあらそひ
と云第之抱一上人、太田南畝子と栗園先文之隠遁の法則發しかいろろやや

宮城千春墓

下若唯念寺中興善導寺ニ葬ル。元年三月十一日死行年八十一。永くよ
裏箱發願ニ依テ先生稿を要一部とい。古体の画讃を乞くすかい句あ
文人墨客群集を把文友未已法後余同極樂会ニ列シ云々を以テ
小野小町墓

下野川壹岐の守家ハ年ハリ。元年小町の七百年忌ニ際シ云々
法ヲを修すと云いろるを以りや今時すると所也ろ。此ろかい事ニ
文稿完ル。

牛込時来行墓

牛込宗参寺ニ葬ル。寛享四年十二月廿九日死法号明安隆殿田原宗原立天心大居士。私ニ云ル奥立ヲ以セり。牛込
八大胡客円山精晴行年ニヨ居ヲ以テ大胡ヲ牛込ニ改ムヨリ三右ニ門。浦院天正八年小俣家落城後徳川家ニ
仕ヘ文禄元年ニ没ス。（この歌関のふもも後年元和元年ニ子ニ云々ル。ヨリ長十五年ム。）寛永ニ年ニ没ス。牛込ニ葬ル。
法号ハ云々ル。元和六年ニ没ス。

横田治助墓

下若ニ云法喜寺ニ葬ル。文政三年ニ十七ヨリ死法号ハ院左文日今信士ヨリ門人三世ニ至ル。三次ニ天保十四年卯
の二月ニ至ル迄ニ自ヨリ初代横田の門ニ入ル。四年ニ没ス。法号ハ云々ル。
本郷前栽作業迄年ヒル。ニ名横田ヲ改メテ名ヲ治助ト号ス。卯年ニ没ス。
墓ハ世話人ニ云々ル。

宮城野信女墓

下若ニ云法喜寺ニ葬ル。文政三年ニ十七ヨリ死法号ハ院左文日今信士ヨリ門人三世ニ至ル。三次ニ天保十四年卯
の二月ニ至ル迄ニ自ヨリ初代横田の門ニ入ル。四年ニ没ス。法号ハ云々ル。
本郷前栽作業迄年ヒル。ニ名横田ヲ改メテ名ヲ治助ト号ス。卯年ニ没ス。
墓ハ世話人ニ云々ル。

真乗院稲葉正之公墓

真乗院殿前豫州大守正之公。寛永十年ニ没ス。法号ハ云々ル。
りうえもんハ妙ヲ以テ名ヲ仮ニ改ム。辞世ノ発句ヲ残ス。
句ヲ改ム。死後ニ教ヲ受ケ。左文ニ左文字ノ短刀ヲ乗ル。
今ハ妙ヲ以テ西念ニ号ス。左文ニ松平要四郎ニ預ケ。
人ニ古代杖ヲ与ヘ。形見ニ残シテ一家団ニ。
川ニ住テ老後帰天ス。花川寺ニ葬ル。法号ハ云々ル。

太田成睦墓

法号ハ金蔵寺ニ当ル。宝永三年四月十四日死。成睦ハ法号ハ良。有ニ依テ云々ル。
帯先ハ名ヲ改メ初ニ住ス。法号ハ梨ニ本ヲ書ル。古郷ハ歌ヲ書ル。

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用

年十月十九日卒享年六十二男運次係與義家を継ぎ次男某は馬琴に入門與
有文政元年を継ぎ二男幷二男いと三女みち四男幸経今十四才にて三男
和右ヱ門與吉六年より伝田町九段坂下に住す十四年大作卒清吉は仕へ十四年
出生十六才にて江戸を去ること云神保若狭守様へ馬琴と共に仕へ清川八郎右衛門
佐原鞠塢門人と称す実は瓊浦の者故郷の農民と偽隠れ玄同門弟若
衆一年ほど学ぶ天明年号分世を欺欺流行すをを諦めて故郷へ帰り曲輪馬琴と
なりも読本作のうち蓋屋長作一部を綴りて曲亭と号をとる柳亭種彦
松亭客傑墓
肉食妻帯寛永町西丸院は享和元年十月廿五日卒行年を改従三位を叙せられ
松嶺と称す性豪宕心学を修し儒を補せられ旧幕府初め多き志を奪ひ
りと雖旧領封建時代の士も幕門の帯刀今は大時代文化時人気よく別るるの
在りか朝敵徳川家に仕へ維新後退去寄傑の称名世に居幾多律若松城
才政城代軍将評況ありて名を国門に降伏一旦禁錮せらるも一世の
日光に客死とりしが後名を辞して本日向守と改町住郎より
養嗣嗣名乗るも後に復せらるも遂に病没せらるも墓は蒲田
相馬大作墓
大作物真同門人関良助の墳墓に偽筆者後年よりて実を尽を安置せ
ま二基ありて大作の大願信士良助の判白信士と諡せられ表向は実
信士とせる知剣利情信士法名にて墓地下より遠族の歎めくり墓
大作地獄院殿義風日勇居士と墓誌入りしを墓石に彫刻
帝を憚り無縁仏にて二基共墓石を立てず実に潜まりの如き世界故所
真実共墓を墓石を立てず実に潜まりの如き世界故所
冥府地獄へ墓を教せんと欲す新田次郎白浪記念碑を待受相撲せ
旅宿より帰りて後ち程なく病死しかし川人良助を呂昇に託
ま乞ふ為了の川人の為めの徳を偲ひ千代住一筆を数枝し

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用

布衣となる本妙寺に葬る　安永五年三月晦日卒　名景元　年八松山和泉　金四郎　従五位下に叙し大隅守に任ぜら
る後又左衛門尉を襲ぐ　左衛門尉景晋入道楽土の男　又官を辞して致仕し家督を景元に譲る
上総介英潤及小納戸の内にて五百石の采地を領し　其後官に擢られ町奉行の横行を禁じて景元弱
冠より頗る法度に明らかなり　同年齢の友と一時僭濫の徒をなしゝが本性賢にして聡明なる者なれば非を知り痛く悔て之武
の為ることを悔改め　修飾謹厚の実をなしゝより　曹律の的徴せられ小性組の番士となり　抜擢されて西城の小納
戸と徴され　小納戸頭取格（最初二知又其後目付を経て叙爵して大隅守に任せらる又職を勘定奉行に転して天保六年五月四日）作事奉行に昇進し　文政十年ゟ同九年勘定奉行に移り出る事方を
後ち同十年三月二十日町奉行の命を奉じ　其結構内の庶子所謂北町奉行に移徙す　同十四年二月廿四日大目付に昇せ
同日本職は大坂町奉行阿部遠江守正蔵を町奉行とせらる　許可は免廉に其職を惜まれさるかとし　断
て景元は漫に大目付の名称を受けて抜擢合方限他の事を執らせ　弘化元年長崎の騒動に南町奉行鳥居甲斐守
忠耀同事件に関係のことあつて同九月廿四日其免職も憚る所ありしか　辞職して寄合席に加へられ其
後職を依頼登守正備を以て一時其後職に補せられしが　在職久しからず　同二年三月十五日小性組番
頭に轉せらる　同日景元は勤列大目付の席より再び良好の後職町奉行に補せられ　数年在職して宅へ
致仕し　前翼如回に借し　秋々舊跡として職務に力を用ふることの多きを得たり

水尾谷四郎墓

此は武蔵府中寛徳寺大師堂の後にあり　高さ一丈許　周囲十尺　相伝ふ高寺傳へて水尾谷四郎
寛徳の開基なりといふ　法諡勇禅院興居士と号すといへり　古墳といへる此塚は水尾谷も
あり　寿永年合戦の時源氏に属し　名を揚げ忠勇力を奮ひし水尾谷四郎の墓なりと云ふ　世に名
高き武士なり　其兄牧童にあるを記せざるはなし　平家物語に武蔵国の住人水尾谷十郎　同四郎と
連に記して此る　実は十郎なるを世に知るは少なし　今は後人に伝ひ古きを忘るゝ事多かりしも
旗本にて子孫や　謡曲に傳はれり　水尾谷四郎が景清とたゝかへる事よく人の知る所なり　東譜　文政五年七月
奥州往復記　往復記に十郎は兄にして弟なりと云ふも未詳　余は考ふる所由なし　羅山詩集に水尾谷四
郎旧跡詩に第下云　此處有小祠世傳水尾谷四郎旧跡也　其後予刀劍客推心欲述此人力無景清首一
頸一抜角相觸両箇闘争元是泥丈土人　詩にいへる此則于操中より古き古墳を改めしと云ふ　高さ尺

[illegible]

比企判官能員墓

同郡宮殿村に在り古人判官塚と称ふ能員は近福は[illegible]

[illegible]

帯刀先生義貫墓

同郡大蒲村人家より[illegible]村氏丈左衛門といひし者は圓中に在り[illegible]

[illegible]

恋川春町墓

四谷新宿恵通禅院寺に在り寛政元年七月七日死其享年四十六春町は名は格性深通称[illegible]

[illegible]

鳥亭焉馬墓

本所表町最福寺に在り文化五年六月二日死行年八十焉馬通称は和泉や和助中村氏本所相生町に

[illegible]

[illegible]

油谷倭文子墓

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用

徐川湖十墓

山谷宗林寺に在り元文三年七月廿六日死享年六十余湖十ハ岩氏本者房と号ス前後に南蘭に改む其角門人の冠たり其角は忌或を秋色とかく文しと云ふ

鯉屋 杉風墓

墨地和尚寺中成務院に在り享保十七年六月十三日死林葉房と号ス家業幕府庖厨に急鱗調進に従ふ事を称して此恵屋と云家号を鯉屋道祢を市ゝ清公務の余(よか)俳諧を楽む故に茶舎蓑状蓑苑木の別号を山田平町に住せ歿後一元居士と諡せ其所ハ二本

深見自休墓

駒込氏所龍光寺に在り享保十五年三月十六日死法名一慈院心演自休居ハ墓と記せり自休ハ近世奇跡考に深見十左衛門本姓ハ深溝名ハ貞國と云寛文の頃江戸に二方男道といふもの許多ありし其僧の如しらえ強きをうじき弱きを見せけ人は危急を見て救ハせといふるなし若し俳諧を知しを近室年中龍池の梅野宗固江戸に下りし頃其門に学ぶ一時は句に[illegible]也来てゝるよりしの額際男の丈ひくき男しが額ハひろく如きあけたるが此句を其頃の小家に額のきハの前から見えぬを来てゝるなり

し此丑と唄ひけるよし天和の頃故ありて謫せられし翌年の春の句に梅あるや若橋ハ如く称ども此句者非とあり寛永中二十四歳を遷らる鳴郷先老年に及びても二尺四五寸の朱鞘の大脇差をさゝるなれど形容年より若く見えて気力壮年の老に揃りしとて遂に剃髪して自休と称し菩提所本宮氏所龍光寺のうちに房を作りて住ぬ享保十五年三月十六日歿享年九十歳龍光寺に墓を一慈院心演自休居ハ墓と記せ侍へて十番門若りし時人と共合せ云ふ歯を二枚かきけるが金を以て入歯を作り入しとて以上古今使客侍洞房語図の後に市ゝ者を加へて云ふ人の髪の自休実ハ此人遊るなりと記せり結ぶに鳥瓶坊ハ小世間起原にハ又一説ありて髪の意体ハ他人のるなりとも

板坂卜祝墓

満泉寺中西王院に在り明ノ元年十二月十二日卜祝名ハ如春一画を以て業とし林信篤撰の碑ハ俗名院に建り卜祝遺ひ砂利勝に文庫を建数万巻の志籍を蒐む世に侍ハ云満泉文庫是也

山乗素行墓

牛込宗久寺に在り貞享二年九月廿二日四歳にて死素行ハ道祢を志五左衛門兵学に精妙し元浅野[illegible]来如正長□の後に浪人して犯法のるゝ事て旧ゝに頼られ近室三年教免せられ大に山乗流の兵学を世に[illegible]

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

清水如水墓

浅草金龍寺にあり享保十三年正月五日没す年七十二如水ハ江戸横山町の人にて根岸に住し和哥を好みし其年正月こよりの和歌に「ゑぐ喧嘩地震雷火事の外に飢饉煩ひなき世の中にあらまし」とて同月五日の暮方月代湯あみして大辞世を好みて寿りしまゝ終ける墓碑ハ瓢の形に造りたり

北村湖春墓

浅草天嶽寺にあり元禄十年正月十五日没す北村季吟の男湖春ハ季吟の長男家業を父に受け哥家の風をも吹せるんと学力大に進みしかども五十有余風吹来りて老を冥らぬ人となりしを其角か句に清く清む経冊もなければ跡を絶しハ惜むべし享年五十七

金子十郎家忠墓

糀町元山王前法光寺長泉院にありと白戸兼子にみえたれども今確ならず新編江戸志に梅林寺にありといへり此辺に多くあり今其辺の男根ハ此家忠の塚を称しけれバいかにやといつの頃其年月も詳ならず

関孝和墓

牛込七軒寺町浄輪寺にあり宝永五年十月廿四日法名法行院殿宗達日心大居士と云孝和字子豹称新助号自由亭と云信濃佐久郡内山の住人内山源太郎永康七代内山七兵衛永明（始駿河亜相忠長卿に仕へ大御番士と云）の二男母ハ安藤対馬守の家臣湯浅与左衛門某が女也関五郎左衛門某子なきによりて（嗣ぎ後大蔵院殿に召されて御天守番となる）家を嗣ぎ関氏を称し甲府の膳籍に司計の職を掌り禀米三百俵月俸十口を賜り後召されて台府に仕ふ（宝永元年文昭院殿西城にうつらせ給ふ時従ひ奉りて御勘定衆を勤むと云先生子なくして甥新七某を養ひ家をつがし甲府の勤番に列し享保廿年罪ありて放されし家たゆるによりて其譜を家するものなければ後鑑を失ふ）先生人となり頴敏にして芸術を好みといへども人希能の差謬あるをハ忽ちにその失策を示す衆嘆服せざるものなし天文律暦に精通し古今未発の術理を探し発微算法其外数十種の書を顕はし数術中興の大祖たり門人関流と称す（先生其始め京荘左衛門吉種に学ぶ吉種の師ハ毛利勘兵衛重能といひ豊臣氏に仕へ大坂城中の人之取除滄鶴を著し世に古の算師と称す）寛政六年後学本田利明等碑を建て其功徳を称すと数学洪業にみえたり

伊奈半左衛門墓

武蔵足立郡東新井宿村関東山源長寺にあり伊奈ハ関東の郡代にて累代墳墓皆同寺にあり

多羽金三右衛門墓

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』 請求記号 863-231
ガラス使用

深川本誓寺に在り　三右衛門ハ始東武線香史和名文五郎　始天下一華在士門に学び後杵屋六左
衛門の門弟となり芳村伊十郎へ出勤す長歌一流を立て三味線を合せ唄を作り家の秘曲とす所謂とふる
長唄にして唄を上手に謡ふ故に杵屋六五郎門弟となる又大薩摩を深くしたりの上るりを作
し門弟を三線譜とする出来唄奈国に於せり

建部賢弘墓

小日向龍興寺に在り元文四年七月廿日死享年七十六法名本山道全居士と云　賢弘始賢行又
賢秀彦次郎之進一に彦次郎と云ふ後に采判官賍信の末流建部与右衛門直恒初賢雄加之男なり母ハ春田長之重女姐
大膳大夫か女也寛文四年江戸に生る兄建部左衛門賢雄始三四郎賢基又賢延と称す字士見其家業の建部年
之助賢明御納戸書頭を勤む正徳六年有廿日死と共に関夫子の門に入りて其伝を受け賢弘独其宗を得て始め
小保方右衛門某の養子となり故ありて家に帰り後桜田の御館にめされ文昭院に奉仕し御納戸御小姓を
勤む宝永元年西城に移らせ給ふ時御家人に列し西城御広敷の添番となり廩米百俵月俸三口を給ふ累
遷して西城の御小納戸に進み二百俵を加へられ月俸を収められ布衣を着することをゆるさる享
保元年有章院殿薨御により五月十六日寄合に列し五年三月十三日何を以て御前へ出勤し奉る

微小等の事を撿す六年二月十二日二丸の御留守居となり十年九月十六日甚緩の事を奉りしより以後
三領萬全を収め後御留守居となりつゝ御広敷の番人を兼ね十八年務を辞し致仕して老免也
の料三百俵を賜ふ賢弘常て本にて日時計を造りまた璿璣玉衡を作りて文昭院殿に奉り研機算法発
微演段諺解算学啓蒙諺解を著す賢弘男子なく建部六郎昌能か四男を養子とし家を継ぐ
それ西城の御小姓を勤め従五位下右京亮に任ス

万亭應賀墓

下谷金杉良感寺に在り明治廿三年八月二十日死享年七十二才法名白蓮院性雲上善居士と云應賀か
ハ道弥楊斎柳亭二代種彦の門に入り下谷御徒町に住し弘化の初めより合巻の著作を試み中頃迄八編作
文章の著作大に行はれて数十編出版し世に應賀の作名世に呼ぶ

梅亭金鵞墓

浅草新堀町称念寺に在り明治廿六年六月三十日死享年七十三金鵞本名ハ瓜生政和と云幼より珍
聞に操觚の珍説を蒐集し奇妙なる事を揮毫す晩年病に退社し同所の自宅に自ら其を疏む松
兆羅月をなとし団欒に消光せしか嗚呼吾如何天寿限ありて遂に逝く冥途萬象に連なる

ふよ[illegible]しく悟あるを[illegible]

佐々木秀長墓

在市若狭小浜妙寺にあり天明七年九月十二日死す法名天量院殿天蓋道顕居士と云
始秀俊と称し文政中後吉田と改む佐々木二郎高秀の末孫安藝の人佐々木四郎左衛門秀清が
嫡男にして幼名は賢之丞通称は[illegible]源次郎と改称して隠士となる明和元年十月九日召
されて天文方となり二百俵を[illegible]ち二年二月廿二日測量のことを[illegible]り京都より越ること七年四月廿二日皆な
本所に於て新暦製作のため日食月食[illegible]ことよりて秀長修正せしを名作をあらはすこと千五十
巻を著述し[illegible]宝暦甲戌元暦法と題し辞表二巻暦法新書[illegible]続編二巻を添てあらしことより
賞金[illegible]枚を[illegible]ふ安永八年三月廿七日請ひて家号を青面と改む天
明二年七月十日老を告て職を辞し小普請となる[illegible]明治二年[illegible]孫世て天文方を勤む

吉田利明墓

高野往生寺にあり文政三年十二月廿二日死法名暁寒院理山元明居士と云称三郎右衛門
号北夷と云後年理明と改む幼名[illegible]にして数学の[illegible]陽城より[illegible]て数学の
奥秘をきわめ後吉田寅生と門人となりて実[illegible]元暦を修補し補校時暦経を著し天明七
年を以て暦元を改め又西洋の暦術を校訂し活[illegible]ふ[illegible]

岡新春平墓

三田春所西巻寺にあり安政二年十二月廿七日死法名暴晃院得誉春平信士と云[illegible]岡新春所[illegible]の家士[illegible]名[illegible]佐吉某が家[illegible]寺にあり初種信の門人となり国学を
学ぶ故[illegible]て[illegible]を[illegible]ふより[illegible]口授[illegible]
而して後[illegible]て平田篤胤の流を汲一層古学の名を博せり[illegible]を受[illegible]して
浅田姓の名字の忠[illegible]ふ[illegible]て[illegible]仕[illegible]ふ[illegible]
仏名道[illegible]助文利家改革乱[illegible]家老[illegible]名[illegible]家[illegible]
職を辞し専ら[illegible]読書を[illegible]り同七年の[illegible]呼領を陸奥[illegible]機会[illegible]移[illegible]ふより春年[illegible]
就[illegible]ふ[illegible]を[illegible]て又浪人し江[illegible]七三[illegible]の学士[illegible]ふり頗[illegible]

英一湖墓

三田春所神[illegible]寺にあり明治五年[illegible]ふて死法名英樹院一湖心華居士と云一湖小花氏通称

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

洋ぶらぐ一蝶の一旅ありと云ふ

安島直円墓

三回寺所洋脇寺に在り寛政十二年四月五日死法名祖心院智覺量空居士と云字伯規号南山称万蕃と云羽州新庄の藩士なり精要算法を考訂すしかして出中の既術高円の手に成るその事に生ぶ出数百巻を撰し関氏以来未發の妙旨を著れ始宗円弧背術解を撰す山路一と如ぐ関して生術関流の秘奥乾坤の体に彰すと直に生秘奥を叩ひて探異さと云近世の名人なり

小松原羣渓墓

駒込大円寺に在り天保五年十二月晦日死享年五十四名は貞字廓大号帝庵房称貞四郎と云ハ丁塚竹島所の組屋敷に住す画を善くし就中人物を好して妙筆世人の眼を驚かせり

柳前森蒼梧墓

駒込徳性寺に在り蒼梧は俗称を名の好者にて当時姉に行ける千鳥町の神速るるは所常人の伯仲すべきにあらざれ一年天城宮に来酒の特徴一日に五六人を興行せしより五六堂の号あり明和三年十二月六日死す享年幸五十

加藤子浪墓

深川臨川寺に在り明治十年十二月十八日死享年六十八子浪通称孫三郎と云韓国と号す陸奥丑白河の生にて名の文人之国学に通して出を能くし既に楊子蔭の末裔なりと云ふ人なり死ぞさまにあらざれ蒼梧性之多く真渕宣長の風を慕ひて著述数部あり

葛西因是墓

小石川傳通院中寛政院に在り文政六年四月六日死享年六十六因是名は質字体文因是道人と号ふ称を健蕃と云大坂の人旭山に学ぶ江戸に講説す文章を以て世に名あり著述十数部あり

平野鶴岑墓

築地本願寺中成佛寺に在り元文三年八月廿六日死法名雲雲居士と云鶴岑は平野氏号五雲亭と云二世杉風の父なり深川鶴岑所に住して俗称に名あり生年が日の暮れるを嘆ぶ詞に拠れり享年幸元年辞せば鶴の道庫の六字の部人著述年忘集あり

貴志沾洲墓

深川正覚寺に在り元文四年一七五十二月十七日死享年八十五才始岸氏後貴志に改む称左
之情始名民丁近日俗所人沾徳門人江戸格和所一丁目住し晩年教寄屋町所岸に移る墓
岡矣に仕へ技特五口を為ふ号を行輪商又五子安乾子と云 著述数部あり

田宮小太郎墓

上野様本町青龍寺に在り正保二年三月廿五日寂年二十七小太郎父の後警の後菩提の為出家して
東慶山の和尚に其ゝ也あるゝ事を考をむすび詩歌絵禅に春秋を送りし不悼しかば二十七の春寂せしかば
空仁大徳と謚し各中威意寺に葬ひり称ゆる宝永六年二月の名憲院殿の所墓所寥月閑田房
補公の息女信姫所月豊寺に依て東慶山に所葬送浄光院殿と謚し之同十九日従一位を贈らるゝ此所
廟を営ゆゝに方り威意寺の地を割ひて公上らるゝ時不在来墳墓に悉く他所へ改葬ありし中に
不出俄に空仁の墓のゝ依然として造り在りしを其後今の様本町青龍院へ改葬しくゝり称ゆるを
を来慶角右跡流行の時となり明治二十三年 及志の従ち院に謀り新に来法口を冥き諸人の来
請に便利すと見えたり

小野於通墓

下谷金杉新屋敷に在りといへども今ハ墳墓は所在詳なるべし於通は元和二年三月五日死と思ひよ
る日に見えたれは姑く之に據る 墓所一覧 に号身葉子不知歿年と記せり 川岡雑談 小野於通の條
に小野於通といへるは義才の女のなり異説いろ〳〵呵り或は大岡秀吉公の侍女ともいへり織田信長公の側女
なりとも云何れも虚説にして其年代甚顔語す 改選諸系譜 百五十巻真田家系下巻載之其略文に
曰く小野於通は長沢の松平上野介康高老臣小聖殿参年ゆる養母実父は松平隠岐守定勝の老臣
長沼吉之様と云者の女之吉之様は二千五百石を領す後隠居利誓して閑歌と号す九千余才にして死
す為通は池田宰相輝政氏家臣嬢川志摩守の妻となる此嬢川は始高聖様中守女を娶ゆゝ男子を生
せ嬢川内親卿と云内親卿より四代目に至り有名て沼蔵老様なる為通志摩守に嫁して一女子を生
し後有名て離別する故女子を引連て母子共に後光明院女御新上東門院の御所へ奉仕せ其後門
院崩在し給ひ又後光明院御介孫となる其後に東門院に奉仕す金子二百本百人扶持下なり此為通文
学に達し能出世に明り人是を褒称す万葉に志し其義才之門院御感の為近代冬に朔夫鶴里伴猫猪
姫の事十二時のうち文に作り沢住検校小関白尚節を付てこれを調ふ其れより近江大夫藤原淳雲

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用

十二條市休大松都町島田嘉次郎ガ元祿の初ゟ續木を商通い津の名長柄の里ゟ續る等ゟを傳ひて住
なるが元來和哥を好て數寄成美ゟ其ゟ半世の人ゟしく交る事ゟしとふりまし後を學ぶゟも一種と
其ぬるゟし文政二年三月五十八歳りて考室ゟ移す生田地ゟ長柄の野ゟりゟある畑の中ゟ松
ゟておつくの杜ゟいひしゟが西福寺は枯れり河内名龍山寺の内ゟ院ゟ後陽成帝の御門ゟ
陰ゟ永筆月琴ゟ【変曲類纂】ゟ掲けゟ杜院ゟ梅ゟゟ殊ゟ上手ゟ
歌ゟ蒙ゟ門人應ゟ又弟ゟ【川岡雜誌】ゟ院ゟ後考的院ゟ
いつるゟ實ゟゟ名ゟ弟ゟ云ゟ【改選諸家圖】ゟ杜標ゟ徽十ゟるゟ
者ゟ室むゟゟ所由ゟくゟ文政二年三月ゟ日ゟ死せゟゟ實ゟ
記せゟゟ山古墓ゟゟ表標ゟ實物ゟ見ゟゟ【墓所一覽】ゟ記載せゟゟ

多代女 ゟ墓

寛永寺井町ゟ号ゟ寺ゟ文政七年七月十九ゟ死法名浄地院陰室智月妙圓大姉ゟ云ゟ
ゟ名ゟゟ南ゟ新ゟ廣ゟ女ゟ書ゟ其ゟ号ゟ居ゟゟ
物語ゟ巻ゟ更ゟゟ云ゟ【改選諸家圖】ゟ杜標ゟ徽十ゟるゟ
者ゟ室むゟゟ所由ゟくゟ文政二年三月ゟ日ゟ死せゟゟ實ゟ
記せゟゟ山古墓ゟゟ表標ゟ實物ゟ見ゟゟ【墓所一覽】ゟ記載せゟゟ

山本檢校 ゟ墓

谷中感應寺ゟ寺ゟ寺改元年二月廿七日死ゟ年七十七法号感應院春根信士ゟ云
ゟ名ゟ大實一号春根ゟ云
ゟの人ゟ井太ゟ像ゟ男ゟ知ゟ太吉ゟ幼年ゟ時ゟ方自ゟみゟ
ゟ職ゟゟ琴曲ゟ學ゟゟ遂ゟ生檢校ゟ免ゟ後ゟ師ゟり山本ゟ姓ゟ譲ゟゟ二世ゟ称ゟ一世ゟ
名ゟり勝久檢校ゟ云ゟ後巴町ゟ移住ゟゟ後ゟ二世ゟ称ゟ一世ゟ

岩井 自寒 ゟ墓

ゟ師大圓寺ゟ寺ゟ墓ゟ元年四月十三日ゟ年ゟ一号ゟ世建号壽隆又商徳ゟゟ
後ゟて画法ゟ修ゟ一家ゟ自得ゟ門ゟ人ゟの骨板ゟ存ゟる
年江ゟ事ゟゟゟ住一晩年淺ゟの芝邸内ゟ移ゟまゟ自宅村ゟ隠

比丘尼說雲 ゟ墓

ゟ師大圓寺二世ゟ文化三年十二月ゟ死說雲上人ゟ俗號ゟ副使ゟ隠退ゟ後一江ゟ
ゟ敬ゟ好ゟ列ゟゟ精ゟ人ゟ流儒ゟ學ゟ喧ゟ
ゟ墓ゟ谷ゟ寺ゟ墓ゟ

秀羽屋里長墓

深川淨心寺にあり 寛和年 月日 秀羽屋里長は本盤津三味線の名人にて名々文字大夫と同座し室戸の未世に行はる梅に
天明寶政の頃は一日節の三味線を引しと見えたり 此頃の芸者寶所に都一中三味せん多羽屋里長は兵師と云ふ名
人なりしが行はれしと見えたり 門人に秀羽屋里粧と云ふ者あり

増田甲斎墓

翁は幼名を立花大米蔵といひ 摂川蔵の士族にして砲術を善くし 任使を奉じ穀代の巻に従来するを
数となりしが後故あらく髪を剃り日蓮宗の信徒となりて池上本門寺の幹事となりて畢任せり 春永
年間露西の軍艦伊豆海に来るや翁奮発猶衣を脱して其に勅を密に諭して同士へ戒し頻りに泰
西の学を修め傳ふ日本語の教授を為して日本語学校を設立し知るも尚的幕府の探偵厳重なりしを
以て案内なく露國に内侍し立花大米蔵の名を改めて三ヨセフ又は ジヤコフ の名になりしが ヤマトフ と称す
蓋國育大和史に亟ずるを以てなり既にして翁召されて分二世歴山帝に仕へ歴進して外務官となり 寿

堂備叔王武才三等勲章を賜はるに至りしが明治二年宏念右府全権大使を以て歐洲を巡歴し露京に至り
翁に西会して勤務せしと云ふ翁後官を辞しくり露帝其功勞を賞して年金三百ルーブル
をなし且旅費七百ルーブルを給しなり翁既に内務し姓名を改めて増田甲斎と云ひ門をとぎし交りを絶ち優
游老を養ひしが明治十八年五月三十一日病に没す享年二十五才送骨を麻布源正寺に葬る翁女年の比より家
に於ける晩年内務せしを以て嗣子なく寡婦獨存してもづるに其冥福を祈りまた翁の功績を知る者少なき
を以て生前の知友たる者の農商務官房次長長洲義幹氏先代碑を同寺に建て語して曰 能殺人者
又能活人 出士入佛 爲異邦賓 去就飄忽 氣宇嶸崎 大和史称 永見精神 と見えり其名漸く
世に知らるも露人 ニコライ 氏の知ちも折々冬訪さるゝと云へりと見えたり

松平野松墓

芝松宿下青松寺にあり一話一言に墓石正面に素性強名を誤り 右に正保二丙年と記し 右に寛和二十年

松平藤松殿と刻し如是と仰人なるも知られと云へり大猷公の御四男に藤松君なりしとも正保五年正月十日
の御近生にて御生母は桂昌院殿同七月四日逝去天徳寺に御葬送齢真院殿と諡せり御系備略にて見えたり
此古墓は同名別人なるなるは勿論なりしとも仰人なるを知られば暫く御しまして識者を待ち
志村無倫墓
芝聖岩下青松寺内忠岸寺に在り宗徳八年二月廿四日死 文雅傳覚に宗徳二年二月廿四日死 今此江年表に據て折し八年とも 享年六十三法名天
質寺祝長生無倫は拾葉形と号ひ又雪巻とも号せり 藤原氏人なりしなり 江戸に来り住し 俳諧を以て家吟
に業ひ大に其骨髄を得たり「行くまゝてあるものとあるは蓮城のみなり」
後茂梁春墓
青松寺に在り明和八年四月八日死 享年廿五 梁春は通称を太仲と云ふ本学学に通し 物産に名あり 桂隠
居と号ひ蓮城の物産に出来し 其父義方も学文あり 松秀と号ひ岩根温泉有馬温泉の紀行あり
萩江露友墓
駒込松禅寺に在り天明七年七月五日死 露友は通称を宗丹下平守胤と云ふ 弘前の泉沼と明和年間長明を
名ゝ語り世に称せらる法号仙寿院琅山泰球居士と云ふ

皐月平砂墓
三田中寺町常林寺に在り天明三年二月廿八日死 名は良珍字は貞叔号は解彦鶴洲所に住せ初葉岡
貞佐に学ひ江戸金沢風調に名あり依て貞佐の先名を譲られ平砂と称せ
福王雪岑墓
深川浄心寺に在り天明五年三月十八日死 雪岑俗称福王義右衛門観世大夫の根源能保世代本業之一号を白
風と云 英家此画法を弄ひ大に其風を得たり 宝厂の所より能の国を画ける巻物或は摂物等を今は称
之事まゝ終画之
三吉野伊之助比翼塚
本所猪口慈眼寺に在り明和二年七月三日 浅草茶荷豪者葉加男伊之助 秋吉原府屋の抱 桂女三
吉野 嘉信の案り 是ひ出て情死せし事発を高寺に埋葬せ 此事は宮川舎漫学 其他の書にも載
せて詳之 此情死を翻案して明烏といふ院本を著し伊之助を時次節と作名し三吉野を薄里に作りて
吉野伊達元新内木此曲節に従り梨園にも演劇せ
和泉屋太申墓

流家西福寺に在り殁年月未詳述ゝ考ふべし太申は俗称和泉屋高卿と云ひて三十万両に住せし高賀之荷田春満の門に入ゝ國学を為す奇士を刊行して我名を不朽に傳へんと春満に謀り関市令我解は流布の逸文ゝ見ハ挟刻し関典を補ふべしと称ていさゝか標注を加へ巻尾に名を記し上木せり其他易経傳釈文をも刻し又松窓関脩齢の話文を請ふてこれに標注を加へ出肆に与へ之善く世に流布せしめ或は亀戸天満宮に連家の命を設定し今迄其門より帝家をゐかりしる臣戸温故名跡志に見之自著の出江島大双低太申夜話ゝ行り奇人能通を始多し人に交り名を博さを為にせしへ之

吉川惟足墓

柳陰神名者吉川源十郎国教内視吾堂霊社先之元祿十一年十月殁す惟足は元日本稽魚河岸の四丸五郎と傳と云者之生質家業を嫌ひ夫妻諸侯に隠居せしが生活の立難きより妻を親戚に托し其身は上京して吉田家の青侍（俗云三石）となり数年仕へしが吉田家幼年ありしかば惟足旧臣と謀り一切の家事を整理す元来学ありしかば吉田家傳の神名を窺知り後には其を精究して当時学務に従ふせり意に吉田家の秘書を始め神名の教授となり今は吉田に勅ゝ学ふ者多く惟足の門に入ゝ学ふ者多し吉田家より発聞する所にしかば居に関東にも学地より所法にありて頗る

国務に及び京を去ゝ冥本に下り其名大に隆大にあり門人も数多ありしかば福島長濃守正利堀田筑前守正俊の吹挙にて天和二年十二月廿五日召出され廩米百俵を賜はり今の京橋新富町角屋敷に住せり

中陽動虎之門墓

本所法恩寺中吉祥院に在り寛政六年正月十三日死行年五十七法号玉松院是春日中信士市川氏訃を告ゝ「冥純夜に啼奴鳥を感ぜしし動虎之門を見るに付ても大に禅師の心を云ふ傳儀は俗も感せり

浜川保五郎墓

芝高輪泉岳寺に在り宝永元年五月廿七日死名義方姓は源浜川は称号之通称を保五郎と云ふ伊家の臣冥氏命左之門氏業は左に出ゝ芝浜松町に在りし頃義方之門に入ゝ関口流の免許の門人ありしが一所氏業の意に報ゝるを以て破門せらる義方人を称し百方詫しども不許義方人は為方にて我年来修業せしも糊口の種を求るに依て今破門に遭ゝ此術を止められ其は御死せる時分ありし関口流の名目を称せば手数を変化し門弟に教授せんとすを許可あらば生前の本望之と云氏業に是を許可せ故に浜川流と称せと慕此しに見えたり

老尹詳墓

根津木喜寺に在り寛政十年三月十二日死其後出れたるを以て右史遺事の時抜雅せられ幕府此表右

業に加へられ就諸中宗族大保甚左衛門貴之友の前我文左衛門の田制に潤飾し幕府公文の體裁を改めしより事歴を筆ね大に文法を書しれるを韜ち目格に法とり一層文格を改めしハ全く其謀ら功之旦君出の系世上に著し

小宮山曹子墓

出陵猶名松戸駅の東方相模某に在りといへども今所在今詳ならぬ故某所記前的滅亡の家下に乱舞しイセイとといふ女房に曹子の亡霊をみるとて人目を忍び此相模某に来り其墓所に詣りしを託せても類国の時にいふなりみん田添とお日しに地なし只其名あるのみと

諸余僧大夫景道墓

今戸法源寺に在り五輪石塔に南無阿弥陀佛法楽延久二庚戌年十月廿二日と彫とり法名及殺年ハ不詳の年歟月日あり哉確守たる證なし是ハ後世子孫等にて建立の記念塔なるべしもや景道ハ讃守府将軍良兼四代の孫左衛門尉致経の二男村岡小五郎忠道の子之此外古墳数多あり

三世子穆齋藜樹墓

岩窟律寺に在り安政七年閏三月九日死去享年五十法名同覚信士通称林次郎號東皐と云ふ

江戸の人本所元町に住し青物を業とし俳諧を好み燕巣園の門に学び杜名を宮倉藜樹と云ふ又隣晴社と別号あり後三世子穆齋と號を襲ぐ書弦頗る多し誠に年来本因房小路の青物商にあり青物を販きしハ之を緩し家に在てハ出勤に暇をさへしむる事あり赤貧洗ふがごとくなりしかも竟も変ぜ(云)其職分の律義の如き兄家の人と称へ交り遊戯とも労して謡曲を見てしれるなる殊にして云ふべき人となりを知るべし

四世子穆齋月良墓

月良名ハ正政通称津れ林蔵と云ふ旧幕府小十人組幕府旗下の士家禄百俵二十人扶持を賜り同名番町に住む子孫なく為に其所在明治三年六月中に死去享年八十二歳法名林如院光山月良居士大久保法名寺に葬る

山路之信墓

若中大宗寺に在り安永元年十二月十四日死去享年六十九法名聴信院智達英観居士と云ふ之信称弥左衛門号君樹と云ふ小松内府重盛の後胤織田右府の旗下山路弾正の末孫山路相右衛門の久長の嫡子母ハ備中の處士久保田権右衛門某の女享保九年町徒に加へられ十八年支配勘定となり元文四年辞して天文方に入り寛延元年天文方製図の事に門人らみより身体をあつかへり

後藤川六郎西川馬場等と云ハ来ハ京都に赴き測量のことを兼る明和元年六月十四日天文方をも
けこと勤むるにより廩米百俵に加へ給ひ月俸ハもとのまゝしこの任嘗て中根元圭に従ひ後久留島義
内義太（内義備前守政樹家臣久留島流の祖とす）を師として最後松永良弼の門に入りて異方を以関氏伝来の秘書を
授し絳老餘覚流術革術等の教巻の書を著し門人に授く

馬場正督墓

四谷南寺町本修寺に在り天保十五年二月十三日死亡享年六十八歩法名欽定院殿顕宗正督日隆居士
と云正督等ハ董々等ハ貢湖祢金と巫と云中先伝ハ東京極の別流岩上左衛門尉秀信十九世の
孫幕臣馬場定右衛門正忠の嫡男なり妻ハ家女上島氏安永六年九月江府に生息寛政十年三
月家を嗣き評定所の留役となり文恭院殿に拝謁し文化七年五月十三日江戸出院廣縁に於て汲術
を台覧なるの後母二室縮緬をあたり後日光奉行支配組頭を命ぜられ廩米三百俵月俸二十口を
あたり焼火の間に家に移し久し懈怠なく勤むるにより時猿黄金をあたり小普請に入り勤仕
並を勤り年始八朔嘉定玄猿五節句月並都て拝謁の席長ことの通り出仕せしこれ故命
せらる始正督北夷先生の門に入りて粗算術の要妙をきはめ天文暦術町見の術に通し補

校時暦西洋の暦法を参訂し後南山にまゝしえて神妙の秘旨を授り其蘊奥に通し甲昌上野
京の地を検し其経界を正し租税を定め東海道中山道甲昌道中の駅々の取締をもつし常憲
有徳孝恭の時廟を修造し最後樹廟の創建するのみを年り備中の玉三上村に赴きて民の獄
を折むるにあり志むし時猿黄金白銀を賞賜せらるも鐘秀算法真積算様剪管術凡例
側円旁小円術精要算法解義象形数五十間解義図後算解義教巻を著述し又故郡中
蔵と計義し熟拝南渠十五冊を上木し千分先所未發の術理教巻を考訂して門外に授け
又山風体の継諸を著くし慈門四大家の上座雲日居の旧号を伝来して猿蓑集解蕃七人を誇のみ
さび笠岡紀行の云を著し天保十四年の病体に秋蟬の一句をとゞめ（長子山織先生の墓の前に秋蟬地を供せ荷の異伝を記し秋蟬の句を添）
（とは秋の中にしたいそぎあるなり此の先生病体の吟なり）閏九月十三日賢を見へ翌三年二月死亡妻ハ大内家掛井忠右衛門政直の女督定院と号へ

會田安明墓

本所則現寺に在り文化十四年十月二十六日死亡享年七十一歩安明始安旦字子貫号自在通称治米光
助と云ハ其先ハ生る江戸に住し獨学を以て教理を行なり也北夷家の教場に志むし四郎を与へるに
より貢湖中嶽の諸先生等が著述を行なり或ハ時極報の神間を設けて其に与ふるに及びて安明

若ふるす能くべし遂に贄を委して北夷商の門人となる算を傳せるを以て北夷商敢て隠す
るなく関子の秘方を叩謁せ岩田貞資精要算法を著す時安明改精算法を撰せ北夷商関
していえらく吾子蓋長せりといへども同流の経をつかるは思ひきる所也且君子の所為につかる
ぞと上求せるるをゆるさず安明思へらく其子勤めて師のいのりにつかふ區々として門下につかふ
よりはむしろ去て一家をたんまつとて辞し去るに考ひて師も又つかへて進ばず家に於て安明桑梓
の地を以て又に最上流と号し改精算法同改正論解惑算法算法廓如を撰して精要算法の
影術を討論す又古今通覧高世鏖劫記天生法指南を著し白髪の老人多中に告るといふ
是より先名を今田以算左門と改め最上流を称せといへども師資の礼をつくしみ同門の交友もと
の如し市野茂斎大原理正雷同して共に最上流を称し安明に属するもの多し

庸牲武左門墓

清泉誓願寺に在り元禄十二年八月十三日死生享年五十一武左門は仕形吐の元祖にて貞享元
禄年間世にあるにあり其誠埃録に座敷吐仕形吐の始は長谷川町に住せ塗師職人亦
非武左門といへる志貞享の頃より中橋廣小路觀物場に莚張の小屋をしつらひ晴天は日く

也とく大に張り木戸銭六文ト云ふ其頃の日に「武左門の居るは張りしすゝ是武左門は禍の門とたとふ
る口吉れ為に罪をなりて元禄七年二月廿二日伊豆大島に流刑六ヶ年間謫居せしが同十二年四月
赦免によりて江戸に歸せり結果とも才能疲労して終に同年の八月死せり

相馬大作墓

芝金地院に在り此墳墓は旧南部藩士忠川主馬守大作を進慕して建る所の記念墓之法名は
金剛院勇哲誠道居士と云ふ有人が宣告文を載せらく其罪の該界を知らしもむ

元南部大膳大夫家来
下斗米秀之進事
尚時浪人
相馬大作
午三十四歳

其方儀津軽越中守家帰く後は古来南部家臣下之筋目にあ之處越中守代に至り家格は勿論官
位其俗様お成相此上昇進もつかまし迚故南部大膳大夫及ひ越中守後南部家同相ひ相成式右
之後を強念に存て居り式高樹し上発病死去致申出及ひ那様に尚大膳大夫に其頃越中守今は遥来座に

傳系指物法師者三十ノ天保十二年ノ月日死年七十ニ而ト動ト傳墓
ニ而ト云ヘ長谷川動ト稱ト稱ヒ墓ニ祭ル而ト云ヘ實ハ元年中村動ヲ師ヨリ傳ヒ其道具方ヲ以テ大ヨ
名ノリ而ヒ此ノ通具ヲ以テ而ト云ヘ動ト傳ノ名ハ世ヨ名ヒ而ト云ヘ土代目ハ土代目ノ弟子ヨ
遂功ノリ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ動ト傳ノ名ハ世ヨ名ヒ而ト云ヘ土代目ノ弟子ヨ
リテ而ト傳ヒ云ヘ其ノ墓ノ圖ハ物ヲ作テ世ヨ傳ヒ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ土代目ノ弟子ヨ
テ指ハヒ稱ヒ而ト云ヘ而ト云ヘ世ヨ指ヒ云ヘ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ土代目ノ弟子ヨ
實政元年增上寺雷門建立ノリシ時ノ寺地大工棟梁野口傳右衛門ヨ依頼ヨリ依テ此工ヨ依テ
工事地取ニヨリテ依頼ヨリ依テ此工ヨ依テ此工ヨ依テ此工ヨ依テ此工ヨ依テ此工ヨ依テ
ヨヲ出生セニ而ト云ヘ大ヨ云ヘ指ヒ云ヘ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ土代目ノ弟子ヨ
而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ

関東物故名人墓所ハ地名ニモトマリト訓ス因テ此ニ作ル長ノ郷士ニ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ
書ヒ此ノ墓ノ所ハ地名ニモトマリト訓ス因テ此ニ作ル長ノ郷士ニ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ
部ヲ脱シ江戸ヨ来リ書町ヲ築ヒ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ
教授シヨリ名ノリ法號家号ヲ以テ遊ヲヲ撰リ校定ヲ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ
賜ハスヲ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ而ト云ヘ
傳後遂ニ遂ニ個樂ヲ改テ改ヲ世ニヨリテ無ヲ以テ吾誤ニ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ實ハ云ヘ而ト云ヘ

荻田東湖遺稿ヨ

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』 請求記号 863-231

ガラス使用

谷中妙経寺に在り明治七年四月二十七日死す年五十九法号是仏院実相日解居士是仏ハ祢を経
たるを云也く儒学を有て業とし世俗谷中の大三河屋と云是し仮名英市後是仏と云仏学を
好之文字を並て出画を能くし就中仮借に名有り

都千中墓

西本願寺中妙蓮寺に在り寛政元年三月十一日死年五十四法号秋宗華信士と云ふ千中ハ信州の
人通称を吉田三三郎と云日本橋大伝馬の養子と成り世に大傳と云しか後家を出て
深川の八幡前に書を業とし書家に引幇間となり荻江露友を改めしが後に書家を止め一
中節太夫となり都千中と改め而来都太夫の家を継しが後芸を捨て継某に芸祢名
の一件と云ハ岩也

因 太化墓

浄土称念寺に在り明治十 年 月 日死通称河原英吉と云ふ日本橋横山町に住し明治十年頃迄
道具を商ひ製図所となる其後より因太化の号有りまた好事文亮の別号有り一席に収ねた
この程知れるを機とし三世仮名垣魯文に学ひ鳳来山人とも号せり小説を能くし又狂歌狂文に名有り戯

明野崎左文其居を訪問せしに太化小説の著述中にて飯も食はずして左文いまて上ら
ざるに第一ぎいふるところを云ふ左文之を何為て云ひたりて如何と云ふも世の無き仮名垣
魯文の弟子なるを板とすかく評せしが太化面白く思ひ奴だと名板役を書き傷つけて
ましていたが仮名垣あり寛ぎどもいふ新代風来山人をもてたぶれてたえまに笑ひて別と
と云ふ著述數多有る中にも梅春芳ハ大に世に行はれたり

二代目桜川善孝墓

谷中三崎妙法寺に在り明治七年十一月九日死年六十六善孝ハ初代桜川善孝の弟子善六の
の男なり初名由次郎と云ふ深川仲町に住せしが天保の頃に至り師の時に名を継ぎ後名
を継ぎ二代目善孝となり大に行はる

艶 佳名門墓

駒込浅嘉町大運寺に在り安政元年十月二十四日死年五十一法号白池院艶阿依寿星居士と云ふ
佳名門ハ観世左阿狂言師なりしが世に名高し後年寛太郎を改名せし

山陽堂 山陽墓

其二年板原教寺中に在り山陽名は久通通称を始め小藤市郎右衛門といひ後純藤都門と改む
其将監殿橋馬佛先幕府旗下の士の村平右衛門の家臣なり匿を業とし生質粗豪雑伝を好
し四方志良に狂詩を学ひて善くしまた粗豪を森羅万象の門に入りて狂詩に名あり平信
名を始め大井手弱また家庭観といひ寛政二年山陽書と改め同八年新坂の制志を列し京都
二年其の名と号し文化十年上京聚の本狂詩家人の免許を受け其名世に高し一代に
佳詠頗る多く門人等名を満りて目系其山門角筈塚の門其他数所に建るに所々紀念とし
まこ著述数部あり

神田　白竜子墓

麻布二本木光雲寺に在り宝八十年七月二十三日死白龍子名は勝久字獲道白龍子は其号にてまた
講武堂江戸陰士男に別号あり通称は神田木工と云ふ江戸の人神田に住居生質傳覚強記にし
て殊に兵学を通しまた好こて刀劍の鑑定を善くし就刀論書の著あり又軍士数部を
著して古今武将に勝敗を論ぜ又者に諸侯の邸にまゐるに軍士を講ずるに元来雄弁
にして傳覚ありしが大に行はれ是を以前講談と称し其流れを扱ひ老数多かり多り

惜哉其墓今なし　大に恩勝寛八十年七月廿三日の條に真寿院実蠡休雄居士神田木工と記人あるのし
男もまた白龍子と号し又に後て刀劍の鑑定に名あり小窓隠談に東武の宦庫に三條家近和
品正家等刀劍極意傳授の秘書ありしを此まゝ宦庫に秘し立れば差なし云し刀劍鑑定の達人
神田白龍子に会せざれ寛政西辰年白龍子の呼挙に依て岡俊寿格を定く東武に召され彼秘書
を備し与へられしに是を以て其名高かりしを知るべし世に父子を一人にこんぞるは謝し

建部　傳内墓

小谷川玄量院に在り明元年四月十八日死て享年七十六傳内名は始め昌義或は昌興称傳内後傳名
二門と云ふ幕府旗下の士にて樋州林田の館に建部の一族なり其家流れ出法を善くし幕府
に祐筆を勤む後世に幕府に記録を代々を以て是と云ふ世に是を傳内流とて大に行はれ
武士に菅原傳授手習鑑の俗曲に取扱ふ流義と云ふ人物を作りしは傳内始め絵義と呼びしに依て
作り出せしと云ふ云ふ所今に俗説微ずるに是に後代仕判誓して宗西と号せり云ふ
しかれ寛政重修諸家譜に以り新たに見るべし

岡本　花亭墓

四谷南寺町に寄寓し、寛政二年九月廿三日死す。年四十九。法号を清院観誉義天居士と云ふ。

一男子有り、幼にして父に別れ、母と共に四谷に住す。名を豊吉と云ふ。成人後、母の為に孝養を尽せり。墓前に碑を建て、母子の事を記せり。

楠息女墓

雑司ヶ谷大行院にあり。一面に「楠正成公息女之墓」と記す。左側に「寛政八丙辰年十月上旬 四谷新宿 井沢玉潔忠敬建之」とあり。楠息女の事蹟詳ならず。按ずるに楠は紀州の人にして、医業を以て世に聞えし人なり。息女は楠河内守楠正儀の女にして、母は某氏なり。父の没後、尼となりて諸国を遍歴し、晩年江戸に来りて住す。文化十四年丁丑正月十六日没す。行年七十一歳。法名を妙善と云ふ。

木下順庵墓

新編武蔵風土記稿に「荏原郡世田谷村曹洞宗龍泉寺の墓地に木下順庵墓あり。碑文なし。」とあり。

正徳二年十二月二十三日没。墓碑左のごし。

木葉靖先生之墓

先生諱貞幹字直夫号順庵、稲葉正元生。元和七年六月晦日生。
十二月二十三日。享年七十八。葉武州荏原郡堤徳村私諡葉靖先生

墓傍小碑寛亮の所撰の碑あり。碑文左のごし。

先考姓平氏木下諱貞幹字直夫順庵府君。数領阿波藩。後領播州龍野。
世住伊賀柏原。氏四世祖首改而移居京師。改木下氏。祖去春君有五男。先考実次子也。
聡明夙学。嚢帝究御園祢。後遊薮而作詩。屈文往来公卿之間。凱詠頗多。実有奥五京儒伯之言。斯文皆嘆其
寿。享十三歳作右卒頌。載烏丸亜相公国遊連天覧。世以国瑞。後受業於懼窩先生。有避先一頭之嘆。門友知貴木槿
軒安東省庵宇都宮遯庵。皆英豪也。雅善。交遊。以移武蔓風。與夜研勤苦。磨学業大進。有多除斎書送。但馬守都生業遊
斉白戸。道永。合決然而帰。浩屏。詠讃。五霜二十年。変名動二天下一。矣当是時。加藩若君公好学。朱子学。士結有二河間東平之風一。遍

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

招天下之名儒[諱]書語文閣先考之名歟聊先考諱曰宗尺立先生之門人也今先生之子永三見寿請先考[諱]曰宗尺立先生之門人也今先生之子永三見寿請先
聊先考嗣永三聊初先考仕於肥公世宅居京師[諱]栗武在北海毬席[諱]不曠往来結縭宅立東武日閑老圃井久適望蔭
鄰閭先考之名諸有見之先考歟小稚[諱]首真宗列国候伯後裔者多矣[諱]辞界往先考[諱]華族高徳派於海内之士[諱]
難其名口映真行蒂荷荀選挙之事[諱]以先考[諱]為首常憲公之初時徴入侍無数令修国史書成而上賞賜甚厚労而
常憲公[諱]諱周昌[諱]命令先考侍[諱]座其必賜以編修之必賜以編修之[諱]先考[諱]諱中庸敬命[諱]近侍其年若何[諱]
侍幸而先考[諱]歟耽母公常憂[諱]難忍日浅也[諱]甚[諱]朝世終日整容嚴粛如[諱]不容者[諱]其至[諱]家也[諱]無居私室[諱]恒盥服端
座人望之如神天資至孝事父母[諱]致其志[諱]極甚養[諱]安愛先[諱]共[諱]被連床父母没[諱]三年裏柏[諱]見骨子猶已出[諱]後後収
藏慈恵[諱]恩[諱]三宅藩庵君女[諱]為配先[諱]卒後不再[諱]娶孤枕獨念知野傍[諱]終年生一無嗜欲食必淚泊服必黄白之縁
寛[諱]享[諱]十有二月二十有三日病卒[諱]享年七十八遠言以孝経一巻相随門人永誼曰茶靖三男三女長教簡先[諱]卒後寛[諱]享[諱]
没一女不娶[諱]終年一世傑悔氏永肖男宗元撰

[諱]編武苑[諱]之記[諱]載せこと[諱]しもの[諱]墳墓[諱]南寄[諱]ちらく[諱]過去帳[諱]もの[諱]所[諱]ありて考ふるに[諱]固[諱]過去帳[諱]もの[諱]所[諱]ありて考ふるに[諱]固[諱]
寺号を[諱]誤りしならんぐぢる[諱]文[諱]墓所一覧[諱]或[諱]古事談[諱][諱]
立宝[諱]ちらん[諱][諱]なほ[諱]粉[諱]如[諱][諱]墓[諱]名[諱]ちらん[諱]指遠[諱][諱]載[諱]す[諱]と[諱]

信受院日妙禄尼墓

池上本門寺[諱]ちらん[諱]墳墓[諱]所[諱][諱]未[諱]申[諱]方[諱]ちらん[諱]立[諱]ちらん[諱]寛永五年七月八日[諱]卒[諱]と[諱]録せり
過去帳[諱]ちらん[諱]南無大檀那[諱][諱]ちらん[諱]行人[諱]ちらん[諱][諱]ちらん[諱]自[諱]樹[諱]ちらん[諱]旅[諱][諱]此[諱]禄尼[諱]東照宮[諱][諱]奉仕[諱][諱]よし
[諱]を[諱]記せども[諱]今[諱][諱]由緒[諱][諱]ちらん[諱]所[諱]ちらん[諱]と[諱]以貴小儒[諱]よいう

實徳院殿墓

[諱]寺[諱]ちらん[諱]立[諱]ちらん[諱]宝永七年三月四日[諱]薨ず[諱]仕[諱]東照宮[諱]数[諱]王姫[諱]喜[諱]諱[諱]浄[諱][諱]真宮[諱]と[諱]称す大将軍吉宗公いまく
従[諱]伊実徳院[諱]ちらん[諱]従三位権中将[諱]ちらん[諱]宝永三年三月廿七日入藁岡七年二月[諱]薨せられ高寺
[諱]葬り実徳院殿[諱]諡す吉宗公[諱][諱]結[諱][諱][諱][諱][諱]後[諱]移らせられ後室[諱]元年十月大将軍
寛重公[諱]ちらん[諱]仏[諱]料百俵[諱]寄附せちらん[諱]よう[諱]
以貴小儒[諱]よ[諱]記せり

従三位源[諱]実徳院殿墓

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

同寺に在り 墳墓の所在は内拝殿の内五重塔の北に建り 深徳院殿ハ正徳三年十月廿四日に死 深徳院と諡す 在世中須磨子と称す 紀伊家の臣大久保八郎五郎忠直か女也 大将軍吉宗公未た紀伊家に襲職中の側室となる 大将軍家重公を正徳元年十二月廿八日に娩して後産の不幸にして吉宗公未た入城以前に死せしかハ高野山に葬送し 深徳院と諡しさりしに家重公の時高野山へ御料米五石俵を寄附せられしに後に従二位を贈られし由 以上小伝 に見えたり

本徳院墓

同寺に在り 享保八年二月廿六日死 本徳院と諡す 竹本氏の族正長の女にて古牟子と称す 吉宗公ハ未た紀伊家に在りし時召せられしより其側室となる 正徳五年十二月廿七日に二子小次郎殿を分娩す後田安中納言宗武卿是也 宗武卿ハ吉宗公入城の時倶に供奉し大奥に在りしか不幸短命 享保八年に逝世しより高野山に葬送し本徳院と諡しさりし之

狩野探幽妻女墓

同寺に在り 法名大法院妙竹自性大禅尼と称せらし 老樗軒か讀老日記に記したれども今ハ墳墓其所在詳ならず

梅屋塚

下谷谷村大預寺に在り 此墓ハ記念の為に所築なる 葬墓ハ甲斐国下和村に在りと云ふ 此墓高さ四尺七寸許りの石前面に盲梅屋の杖をつけて花へたる形を図して彫れるのみにて碑文ハ何も偏なかりしハ四方る緑由も見えしのみにてハ知るに所由なし 当寺の住僧に墓の来由を問ふに住僧いふく文政元年頃府下谷谷村の名香百姓なにし清右衛門というる者法華宗の信者にて身延山に参詣の砌甲斐沢の山腹にて年齢二十五六の盲人持病の癪に悩らされ悶絶したるを見旅中の病気艱苦不らんことを察し側に近寄りて薬を与へ介抱せしのみも病癒し 龍を執りて盲人僅に目を開けども

的日い迎めく神田ふる清ら都い許よ参り和吉の衣吉を計け遣をの作ぐべしと名じよ狂俳をみ…ふく
りしよ堂計年十夜神田我石町より出ん…清之都い行給せし…豊時町の辻焼よ帰り清之都い行迄よ住…
四十ふる所を初ぐ代五ふ儀も疾く後くふをぼぐり…を惨じ大よ教息…様とよんを至しふと千跡海を
月収素…よ潮く所五を初ふ事をぼくふ思い意をふりく清之都よ面梅…お吉比死の一位一件を計け
送言ぼ事をも怨よ張り惨せ業ふよ妻ふ母よまし梅じ…娘金を清之都よ西…句んと子を固く
辞し生金い志うり辞初ふらず私吉ふ幸苦比蓋戦ふる見ば我みふ交例すべ金よいうく作れく彼れ
遂ふ伯せ息ふる収蔭せ…追彼う芳抱を永く吊いまるべ彼よ亡亜鼻下よいうてしっまうり清之ふん
とふる収領すつふ新ふく…ぬば五…係い十今をき又係ふし処伯う取意を五比係う…て海く勢意風辰吉と
り…ふ字法五…係い筑金をぬく田育を購…私吉ん寛備を細ふ懇お吊び兵とり新く中二年比墨吉を種国
四年清之都も病死…海を経くふりしがいふ妻ふつが葬帰ふ…そ誰一人方と新じ人ふうふを係され

ふ家よ味ふせ係伯よ参び五…ふこつも事千ふく病死…ふ不育今五百ふ余いうし皇家戦法を奥一式他よ
活ふつふ人ふふ見い意も示五…係ふるよ…ふ多上意鏡ふり五…係い長寿七千ふく死すふよ五
年も篤実比者ふく子孫四思を忘却せざ…ん易後世よ銭…永く参礼を意く…めざふ記ふすと比物事
振を走…新年せりかい私吉ん辞月今ふりふ今日を明く参礼供養比後ふをふふ意ふ…皇
を物事祭りと称へ私吉なし活之都吏如比法今を轟ふすふと比後係よて今悔比係有を私ふふ事を
作ふりと我人比事祭よふそふ

蚤　森おせん

四谷鮫ヶ橋一向宗心見寺　（前句延宝三年中冬小ふう）お世人ハ仏知意明
振ふて名人の名ふし当時比ふふのおせんと清家寛
春信画がきてせよ…ふとたう後水幕府四慶安妻を新めふ二百俵婦りし金地後たふ

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231
ガラス使用

の妻となり以賄役(賄)を節めし食地一命といふは此おせんが生む所の子也おせんが夫なる
後者門の名又は紀名の人にて将軍吉宗公に従ひ江戸に来り享保三年七月十日病て死
そ正見寺に葬法号覚樹院といふ又は明和二年三月廿二日死し同寺に葬り心光院と謚せり

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』 請求記号 863-231
ガラス使用

19806

田原 佛月彰 墓

墓地 本郷寺に在りと雖も今其墳墓は所在詳ならざれ

佛月彰は相州小田原人士小島某氏長男なり松岡辰方川崎鈴泉太郎に傳習し見え最初見習三人相談するに其に

江戸に出て碌々生涯を終るは殘念なるすやと各自己の欲する藝業を以て一家を起さば人と生まれしこと何るに如

ふずやと云ふ為身強りと若ふ佛月彰いつらく我は學者を修業し出を以て仕宦を云ふと世に一生處世にて生

涯を送らんと欲す辰方は是に反し身は男に應する一藝を研究し或家にて一家を起さんと欲す太郎に傳ハ

身は為人に異り男を為人と為し豪富に成るにずとも心豊にして生涯を過さまく欲すと三人心に將來を得し

如何し佛月彰は學者を研究する事は陰も忘れず完に一家を為し赤羽根新橋端に家居し持明院流氏

主者を教授せ其門に入て学ぶ者頗多し辰方は礼法を以て有馬家に仕へ太郎に傳ハ本稿所二十周に於て東物を

流世に名志を得たりと云べし佛月彰は弘化三年十月十二日先す墓地本郷寺に葬る

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』 請求記号 863-231
ガラス使用

863
231

国立国会図書館　タイトル『野辺夕露』 請求記号 863-231

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『野辺夕露』　請求記号 863-231

ガラス使用